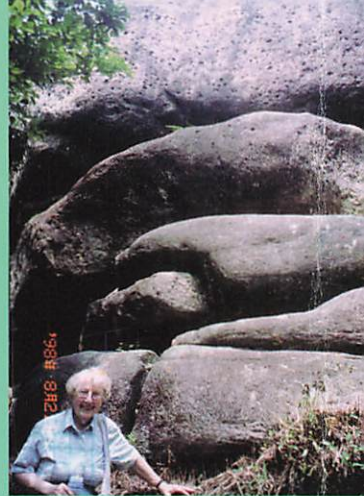


2008

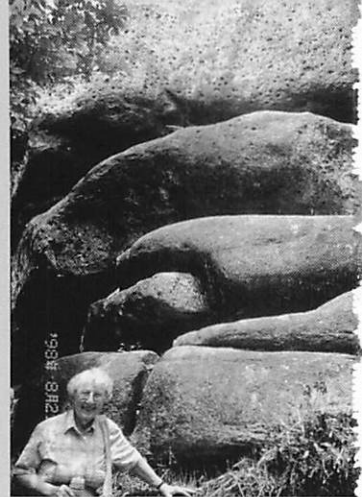
イワクラサミット
in
神戸



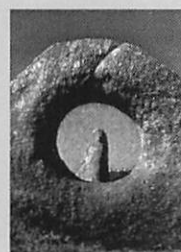
イワクラ（磐座）は現在の神社建築（木造）の前身です。



2008
in
イワクラサミット
神戸



イワクラ（磐座）は現在の神社建築（木造）の前身です。



磬座の歌 いわくら

工藤 寛治 作詞・作曲

一 いわくら ひもろぎ いにしえの

遺跡をたどる 修斎の

地球の平和 希求する

平和のどこしえ 念じ合う

二 「ヒフミヨ イムナヤコト」の教え

古きをたずね 今を知る

宇宙の平和 希求する

とわの平和を 念じ合う

三 「ア」動きて 「アメ」をなし

宇宙の成り立ち 学びあう

たかあめのはら
高天原は 限りなく 広くして

あまねく すきなく 「アメ」満てり

介護福祉士

シンガーソングライター



《目次》

磐座の唄	シンガソングライター	工藤寛治	3
図表一〇三		6

挨拶及び祝辞

会長の挨拶	イワクラ学会会長	渡辺豊和	12
-------	-------	----------	-------	------	----

開催への決意	NPO古代遺跡研究所	中島和子	14
--------	-------	------------	-------	------	----

祝辞	兵庫県井戸知事代理	村上裕道	15
	兵庫県教育委員会文化財室	室長	

祝辞	廣田神社宮司	西井璋	16
----	-------	--------	-------	-----	----

講演及び研究発表

イワクラとの出会い	— 太平洋を渡った古代日本人の足跡にふれて	中島和子	20
-----------	-------	-----------------------	-------	------	----

*質疑応答

NPO古代遺跡研究所	所長	中島和子	
------------	-------	----	-------	------	--

六甲山上 三国岩の磐座に参拝する 70 余名



日本とアンデスにみる巨石文化の共通性

渡辺 広勝 31

*質疑応答

聖地大阪とイワクラの呪術的空間の構成について

橋本 完 48

*質疑応答

松山市「白石の鼻」における巨石遺構

篠澤 邦彦 56

*質疑応答

コメント 足摺岬「トオルマの夕日」

谷 孝二郎

磐座学の確立をめざして

NPO古代遺跡研究所 所長 中嶋 和子 68

閉 会

全体の経過報告とツアーの概略

NPO古代遺跡研究所 東京支局 高橋 滋生 84

閉会の辞

NPO古代遺跡研究所 理事 鳥飼 黎明 88

イワクラサミット in 神戸収支計算書

会員の皆様からの寄付金(二〇〇八年十月以降)

感謝

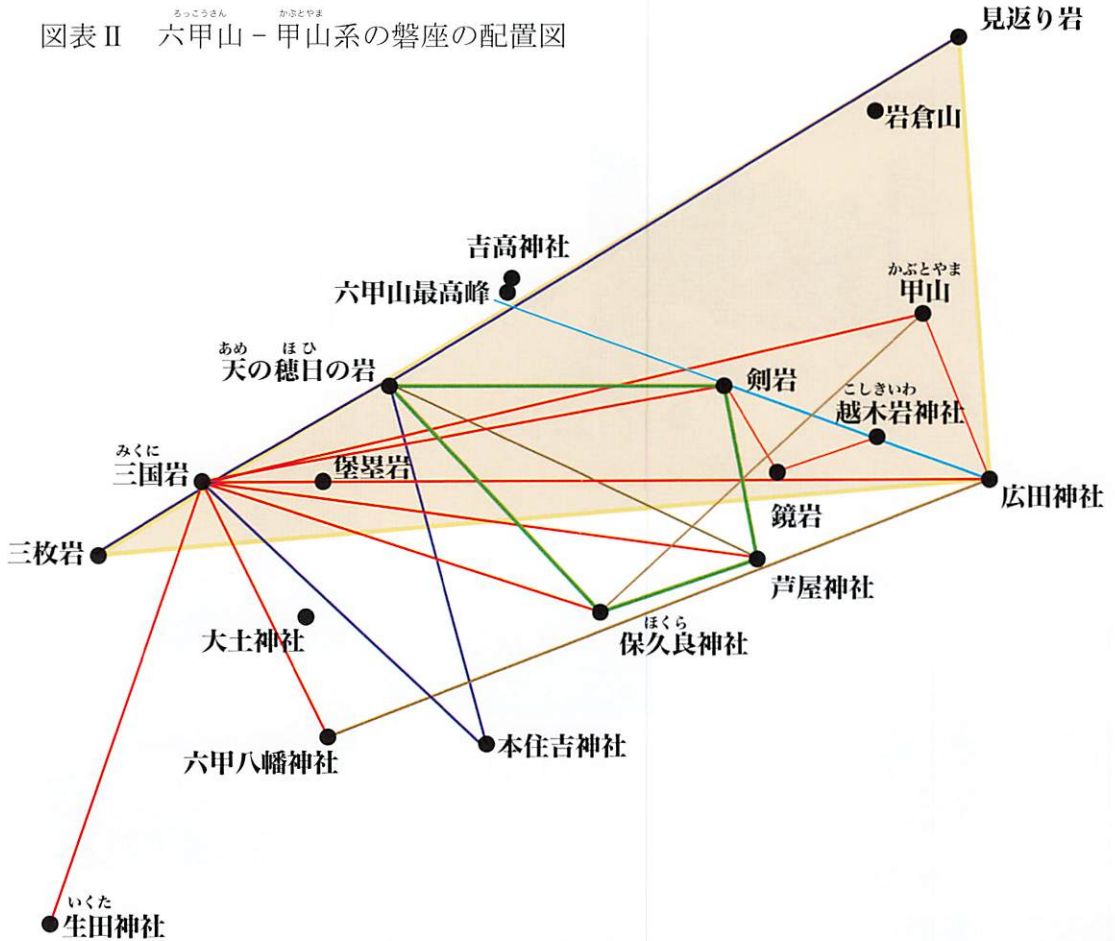
NPO古代遺跡研究所 所長 中嶋 和子 91



図表 I 阪神間の磐座の位置



図表Ⅱ 六甲山 - 甲山系の磐座の配置図



1) 直角三角形型

- ①大三角形 (三国岩の磐座祭場全体の規模を示す)
〔三枚岩 - 廣田神社 - 見返り岩〕
- ②〔三国岩 - 六甲八幡神社 - 廣田神社〕…同祭神
- ③〔保久良神社 - 三国岩 - 生田神社〕
- ④〔天の穂日の岩 - 保久良神社 - 甲山〕
- ⑤〔三国岩 - 剣岩 - 芦屋神社〕

2) 90° 直角三角形型

- ①〔剣岩 - 芦屋神社 - 廣田神社〕
- ②〔三枚岩 - 甲山 - 廣田神社〕

3) 二等辺三角形型

- ①〔剣岩 - 鏡岩 - 越木岩神社〕
- ②〔天の穂日の岩 - 本住吉神社 - 三国岩〕

4) 延長線上

- ①〔三枚岩 $\xrightarrow{\text{西}} \text{三国岩} - \text{天の穂日の岩} \xrightarrow{\text{東}} \text{見返り岩}$ 〕
- ②〔廣田神社 - 越木岩神社 - 剣岩 $\xrightarrow{\text{北}} \text{六甲山最高峰}$ 〕

5) 矛(ホコ)型

- 〔天の穂日の岩 - 剣岩 - 芦屋神社 - 保久良神社 - 天の穂日の岩〕



● 見返り岩

● 岩倉山



かぶとやま
● 甲山



● 鏡岩

こしきいわ
● 越木岩神社



磐座

● 鏡岩



岩門

ほくら
● 保久良神社



西宮市

武庫川

図表Ⅲ

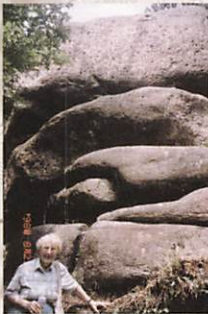
ろっこうさん

かぶとやま

六甲山一甲山系の磐座の形状



磐座



岩門

● みくに 三国岩

● 三枚岩

神戸市

芦屋市



● あめ ほひ 天の穂日の岩



● 天狗岩



挨拶と祝辞



イワクラサミット・in・神戸

二〇〇八年九月二七日

司会者 森本 博

挨拶と祝辞

司会 皆さま、本日は多数ご参加いただきましたまして、誠にありがとうございます。
います。

私は、本日の司会をさせていただけます、NPO古代跡研究所の森本博と申します。
よろしく願いいたします。



それでは、たゞいまより、『第八回 全国大会イワクラサミット・in・神戸』を開催させていただきます。
開催に先立ちまして、イワクラ学会の会長渡辺豊和氏よりご挨拶をいただきます。

イワクラ学会会長 渡辺 豊和

渡辺会長 本日は大勢の方が来ていただきましたまして、有り難うございます。
います。

僕は挨拶というのは、得意ではないので、困ったなとも思うんですけども、先ほど中島さんとお話ししていて、ちよつとこういうことを言っているのかと、急に思いついたことを言います。

実は、僕は磐座というか、巨石、僕の場合は巨石なんです
ことを言います。

実は、僕は磐座というか、巨石、僕の場合は巨石なんですけれども、その巨石に興味を持ったのは、エジプトのピラミッドなんですね。二、三度見に行っていますけれども、ただ建築としておもしろいということよりも、今から二十年か三十年ほど前だと思えますが、ピラミッドパワーということが、盛んに言われたことがあります。三つありますから、第一ピラミッドと同じ形のものを作ったら、それがパワーを持つということを言われています。実際に、みかんが腐らないとか、僕もちよつとやってみたことがあるんですけども、実際にそうなるんですね。その時は、僕もそういう神秘的なところが好きですから、そうかなと思つていました。たけれども、今から十二・三年前だと思えますが、ヨーロッパに行くときだったと思えます。お金が無いので、南回りで行くんですが、ちよつどギザの真上を飛んだ時、朝でした。たまたま妻と二人の旅だったんですが、ちよつとピラミッドの真上にかかった時、第一ピラミッドが、物凄く金色に輝いて見えたんです。じつと見えてもそうだったので、妻に金色に「輝いている」と言ったら、全然



そうではないと言ったんですね。そうかなと思ってもう一回見たら、僕にはまた金色に輝いて見えたんです。その時に思ったのは、ピラミッドパワーというのは、こういうことかなと思っただんですね。要するに、そのような相似形の物を作って、みかんをその中に入れても腐らないということはあるかもしれませんが、それだけではなくて、そういう感性を持つて生まれた人間には、極めて神秘的で、力もパワーも発揮するということをし、その時に思いました。妻はごく平凡なので、そういう感性は無いんですね。むしろ、長いこと夫婦していますから、慣れていきますので、半分馬鹿にしたような笑いをただけで、おしまいだっただんですけれども、日本には石造建築はないものですから、磐座、石の構築物といったらいいのか、それだけが独立して、建築と無関係に、信仰の対象になっていきます。それは非常におもしろいなと思っっているんですけれども、僕は建築家ですの、整然と積んだものとかが、そういうものに興味を持ってしまつて、磐座も、実際に積んだものはずなんですけれども、もう少し野積みのような感じですよ。そういうものはおかしいとは思いませんけれども、ああいうのに、もちろんエネルギーを感じることはよくありますけれども、ちよつと欧米というか、外国のものとうような気がしています。それ以上研究らしい研究はしていませんけれども、ついこの前、僕の著作は、割りと分裂的なものですから、建築もあるし、古代史もあるし、江戸時代のものまで書いていますけれども、たまたま僕の書いた本を読んだ人が、eメールで、自分で書いたものを送ってきまして、

僕の書いた古代史と、万葉集の歌と、非常によくつながっているというんですね。僕は全然思っていなかったんですが、ただ、こうは思っていたんです。万葉集に、岩の歌がちよこちよこ出てきます。僕は、詳しくは知りませんが、多分しつかりした磐座をイメージしながら歌っているんだなという気は、前からしていたんです。万葉集の歌が、僕の書いた巨石の話ではありませんが、普通の古代史ですけれども、それに、いろんな謎解きをしています。その謎解き、それを補強する歌がいっぱいありますと、言われて見ればそういう感じなんですね。そういうのを二、三日前にもらったばかりなんです。今日そういうことを言おうと思つて来たんです。もしそういうことを研究、歌の詳しい人が、万葉集の歌と巨石、巨石そのものの信仰は、非常に古いと思えますけれども、ただ日本の場合には、現在と繋がっていますよね。繋がっているから、巨石に対する関心というのは、多分、欧米だけではありませんが、海外よりも長続きしているような気がします。ですから、万葉集ができたのは、奈良時代の末期ですけれども、その頃でも十分、巨石の持っている意味をわかっています、歌にしていることがあるような気がするんです。そういうことを、もし研究してくれる人がいたら、大変有り難いと思います。

僕は、挨拶らしい挨拶は苦手なので、とりあえずこれを挨拶とさせてもらいます。

開催への決意

NPO 古代遺跡研究所 所長 中島 和子

今から六年前、丁度第二回イワクラサミットが足摺岬で行われた時のことです。私どもの研究所から、数人が参加致しました。その前年に私は単独で足摺岬を訪ね、彼の地の皆様にご案内いただき大いに啓蒙されておりました。参加者達は私と同様大いに啓蒙され感動して帰ってまいりましたが、その際大きなお土産をもらってきただけです。それは懇親会の席上で「次のサミットは是非とも神戸で」と言われたと言うのです。さて、どうしよう。名指しは有り難く嬉しいが、実現の力も自信もないと騒いでいる間に、私が脳卒中で倒れたものですから、この話はどこかへ吹っ飛んでしまいました。



それから五年が経ちました。左麻痺の後遺症を抱えてはおりませんが、私は今もまだ生きております。そこで丁度一年前の去年の秋、月例研究会の席上で、皆に尋ねました。

「私が居なくなっても、サミットをやってくれますね」 私は樂觀的でした。『もちろん貴女の遺志を継いでやりますよ。安心して』という答えが返ってくるものとばかり思っていたのですが、なんと、「やらない」というのです。それも皆が口をそろえて「絶対やらない」と言うのです。「えっ？ それなら、私が生きている間にやらなくてはいけません！」「残された時間は少ない。急げ！」ということ

急遽、この時期に開催することになったのです。

ところで、この時の所員の反対は私を奮い立たせるためであったことに後ほど気づきました。私も、例え反対されてもサミットを引き受ける決心をしてよかったと思うに至りました。というのは、無謀と思える計画に対して皆が心をひとつにして努力することは、研究所の体験として素晴らしいということ、また第二に、私たちはここに尊いイワクラがあるから随分勉強いたしました。イワクラとは何か、どう向き合うのが正しいかを追求して、古典を読み講師を招き、現地を探索し、自分の視野を限りなく広げることができたのです。

そのイワクラに対して感謝の気持ちを、サミットを通して表明することができれば、これほど素晴らしいことはない、と思ったからです。そこへイワクラ学会の本部から二十万円を助成するとの吉報が入りました。一万円の会費で百七十人余の会員を擁するイワクラ学会です。その全国大会のために二十万円の予算が計上されていたのでしよう。有り難いことです。

只今、受付からの報告では、参加の申し込みは九十名に達したということです。

本日は、こんなに大勢のお集まり、本当に有り難うございます。

(当日記録より抜粋)

司会 続きまして、地元兵庫県の井戸知事の代理といたしまして、

兵庫県教育委員会の村上文化財室長様よりご挨拶を賜りたいと思えます。よろしくお願いいたします。

村上 最初に、中島先生から兵庫県井戸知事へのご依頼がありま

兵庫教育委員会 文化財室長 村上 裕道

したが、折悪しく国体への出席のため九州へ出かけなければならず、代わりまして私が、一言ご挨拶させていただきます。

兵庫県では、先の阪神淡路大震災の経験を元に、身近な文化財を地域で生かし保護していくと、歴史文化遺産活用構想を

県教育委員会で提案いたしました。

そして、現在身近な文化財の調査を色々と推進しているという状況で、そうした取り組みのひとつに、兵庫県教育委員会と阪神間の四都市（神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市）の各教育委員会と共働して、大坂城の石垣の生産地の調査を進めています。

これまで大坂城の石垣の石材の多くは、小豆島をはじめ、瀬戸内に転々とつらなる島から調達してきたと言われてきましたが、六甲山の東側の南斜面にも採石場がありました。それが、私達のいう徳川大坂城東六甲採石場です。

私達の三年ほどの現地調査及び、地元研究者による従前か



らの調査研究によって、山頂の巨大な岩石から、石垣用の石材を切り出していた様子が分つてきました。また、石材の母岩となる石には、丸や四角の刻印が打つてあります。それは石を切り出すための、占有を示す目印だろうと考えています。西宮市の甕岩神社の境内にある巨岩の表面にもそのような刻印が複数刻まれていることを確認しました。江戸時代の初期なので、その岩が当然ご神体であるということを、承知の上でやったのだらうと、正直我々は、そのような神をも恐れない手法に驚きました。

元来日本人は、例えば、奈良県桜井市の大神神社（おおみわじんじや）が、神奈備山の三輪山をご神体とするように、礎の敬意、崇めの気持ちを持って自然と共存することにより、独特の文化を大成してまいりました。本日のサミットの主題である磐座は、神が宿るとされる巨岩に対する信仰のひとつと考えられるでしょう。後になってその気持ちが研ぎ澄まされ、例えば三重県の、花の窟神社（はなのいわやじんじや）や、京都の松尾大社などのように、神社のご神体となり、また、地域の重要な信仰の対象として、今日まで多くの磐座が、大切に保存されてきたものだと思います。

兵庫県内にも、そのような事例が四十カ所以上もあるというところで、その数の多さに驚いたのが実情です。私自身、文化財建造物の修復設計の担当として、三十数年やってきたもので、その中には、磐座と関係すると思われるものもありました。例えば、淡路の岩上（いわがみ）神社本殿の修理の時に発見したのですが、本殿の背面が斜めに切られています。建

築的な感覚からいうと、そういうことはあり得ないことで、どうしてだと思ひ調べました。その結果、背面に大きな磐座があり、おそらく軒先が磐座に刺さらないように切ったのだろうと思うに至りました。江戸時代の初期の建物ですが、その神の寄代（よるしご）にある岩に對しての思ひが、その頃にも繋がっていたというように感じました。

また、高砂市の石の宝殿の生石（おうしこ）神社には、背面の岩山をくりぬいた浮石を、ご神体として祀っています。この「石の宝殿」というのは、実は千六百年ほど、石の採石場として続いてきている所です。畿内一円に、石棺石の供給基地として、続いてきた所です。その後中世には石の材料として、そして近世にはお城の石垣として、姫路城でも使っています。また明治以降は、間知石（けんちいし）として、連綿と続いている所です。

現在、史跡の文化財指定を目指しており、我々としては、古代から連綿と続く石の文化を、現在社会に表現したいというふうに考えています。

このように兵庫県内には、多くの磐座が存在し、全国から集まる皆様には、この機会に、ぜひこのような場所を訪ねていただければと希望しております。

最後になりましたが、本日の磐座サミットが、その昔磐座に祈っておりました人々の深層心理を、再確認する機会になればと願っております。積極的な討議をしていただき、成功裡にこの会が進みますことを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。

司会

続きまして、廣田神社宮司であられます西井璋氏より、祝辞を賜りたいと思います。よろしくお願いいたします。

廣田神社宮司 西井璋

只今御紹介を戴きました廣田神社宮司の西井璋でございます。

今日は、このイワクラサミットに参加させていただき本当に有難うございました。

色々な貴重なお話をお伺いしました。全国からの皆様の研究、また体験されたお話に非常に興味を抱いた次第です。

私の奉仕して居ります神社は廣田神社と申しまして、御祭神は天照皇大御神の荒御魂を御祀りして居ります。荒御魂とは、あまりお聞きお呼びではないと思ひますが、荒御魂に對し和御魂（にぎみたま）という言葉がございます、神様も我々人間もこの荒御魂、和御魂で形成されていると古代より考えられています。

伊勢の神宮に参りますと御正宮に和御魂がお祀りされており、荒御魂はその裏手にあります「荒祭宮」というお社にお祀りされています。このお社には、鳥居がありません。何故かと申しますと、御正宮の中重の鳥居がそのまま引き続いて、荒祭宮に繋がっているといわれています。いわゆる御同体という事です。そうすると、廣田神社の荒御魂に對す和御魂はと、皆様はお考えになられると思ひますが、実はそれは、



天照皇大御神が「ニギノミコト」に御鏡を託して「吾を視るが如く御床を同じくし、御殿を同じくして祀るべし」といわゆる「同床共殿」で祀れということで、御鏡を託されました。

ところが第十代崇神天皇の御代同床共殿は、恐れ多い事で、御鏡をどこか良い所を探して、お祀りしなさいと皇女豊鋤入媛命に託し、大和の笠縫の邑にお祀りしました。次の第十一代垂仁天皇の御代、皇女倭姫命に再度託し、探し求めた処が今の伊勢の神宮です。前に戻りますが、大和の笠縫の邑にお祀りするときに、「写しの鏡」を作らせました。所謂天照皇大御神の分け御霊、御分霊でございまして、宮中三殿の賢所にお祀りされています。

宮中三殿と申しますのは、三つのお社がございまして、中央に賢所(ケンショ・カシコドロ)、こちらに天照皇大御神、向って右側に神殿(シンデン)と申しまして、宮中八神と天津神、国津神、向って左側に皇霊殿(コウレイデン)と申しまして、歴代の皇族様をお祀りしたお社でございまして。この賢所に「和御魂」をお祀りしておられます、『日本書紀』に依りますと、神功皇后の熊襲征伐御凱旋の帰途「荒御魂はこの廣田の国に祀れ」との御神誨により、廣田神社が御創建されました。従いまして、宮中の天照皇大御神と廣田の神様が御同体という事で、明治四年には、兵庫県内で唯一、最高位である官幣大社に列せられました。

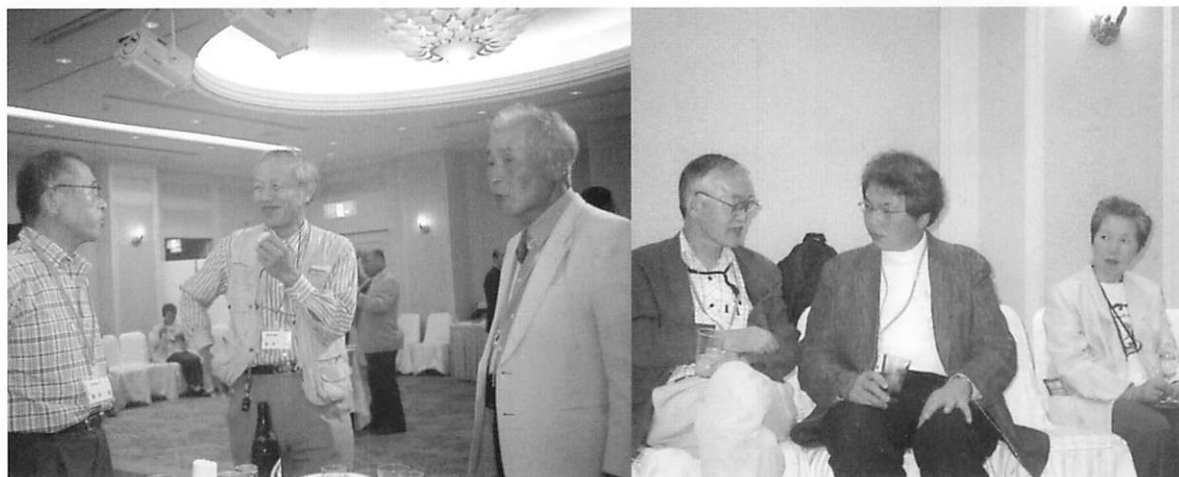
ところで、廣田神社といえば阪神タイガースですが、タイガースの前身の大阪タイガースの時代から必勝祈願に参拝されています。タイガースの優勝は廣田神社の祭儀と非常に関

係が深くその一例を申しますと、昭和三十八年廣田神社の戦災復興の翌年三十九年に優勝し、昭和五十六年に廣田神社が火災に遭い、復興しましたのが昭和五十九年、その翌年六十年に優勝、また平成十三年が廣田神社御創始千八百年祭で盛大にお祭りを齎行致しました。平成十四年に優勝と思いましたが、平成十五年の優勝、すると十三年から一年間あいてるので、もしや又近年優勝か、と思いきや私が前任者と宮司を交代した年平成十七年優勝したではありませんか、ひよつとすると今年も、でも、ネタがありませんもので。

八月二十四日に、中島先生自ら、サミットの成功を御祈願に廣田神社に來られて、廣田の大神様の大前で、玉串をささげられ御祈願なさいました。

今日は、阪神間で盛大に開催され、おめでとございまして。磐座の神様の御加護と共に、今日は、廣田の大神様の御加護も頂き、今後磐座サミットが益々盛んであらんことを御祈念申し上げご祝辞とさせていただきます。

講演及び研究発表



イワクラとの出会い

―太平洋を渡った古代日本人の足跡にふれて

NPO 古代遺跡研究所 所長 中島 和子よりこ

一・スサノオの古代文字

北米のずっと昔の古代先住民の住居跡や史跡を探訪する旅に出て来ないかという誘いの手紙受け取ったのは、一九七五年春のことでした。ち



ようどこの時は、北米南部の人口わずか八百人の小さな町から出馬したジョージア州上院議員ジミー・カーターが大統領選挙に出馬し、一九六〇年代には人種問題をめぐって分裂に分裂を重ねていたアメリカ社会を、やがて一つにまとめるという奇跡の年の始まりでした。

手紙の主は、アメリカの女性政治学者フランシス・M・フォランド Frances・M・Foland (一九三〇—一九九五) でした。彼女と私は同じ政治学の専攻でしたが、彼女は南米、特にブラジルを専門としておりました。ブラジルにはアマゾン地帯があります。このアマゾン地帯には毒虫、毒蛇、毒を持つ魚や猛獣などがたくさんいる上、マラリアのような病気も多く、危険な場所として外国からの研究者

は誰も近寄ろうとしなかったのですが、フランシスはアメリカの学者として初めてこの地に足を踏み込み、アマゾン地帯の日本人移民部落を調査した勇敢な女性研究者でした。ちょうどその頃、私は北米にいて、ミシガン大学での三年にわたる留学を終えたところで、次は大学を離れアメリカ社会へ出て、自分独自の研究テーマについて調査をしようと張り切っておりましたが、南部は危ないと言って周囲から猛反対を受けていたところでした。黒人解放運動の渦巻く南部は、貧困であるし人種差別があり、アメリカ人としてはあまり外国人に見て欲しくない場所でした。それに皆は危険だと言いますが、南部の何が危険なのか、彼らにも私にも、充分には分かっておりませんでした。黒人に対する差別が頻繁であった時期ですから、黒人に対する見方も偏見に満ちていて、表面はおとなしく見えるが、野獣的な本性を持っている危険な人間だという見方が一般的でした。



Pl. Frances・M・Foland

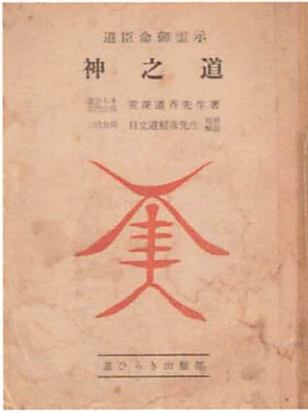
私のテーマは「黒人の解放運動が

アメリカの政治をどこまで変え得るのか」だったので、南部は危ないと大学のみならず婦人団体も近所の人達も毎日のようにやってきては

「行くな、行くな」と反対された時期でした。結局大学を回って、講演会をしていた学者たちの中の一人に南部の黒人指導者ロバート・

F・ウィリアムス Robert・M・Williams がいて、その講演をきつかけに私の南部への道が開けました。彼の村へ行き、彼の家に泊まり、その後は黒人解放運動の中心地であるアトランタで、黒人を師として半年の調査研究をすることができました。このように、フランスと私は何か共通するものを持ち、またたく間に無二の親友になり、共に太平洋を何度も往復することになったのです。

当時フランスは、インディアンカントリーと呼ばれる西部の四州、特に先住民の人口が密集していて、昔からの伝統が豊富に残されているアリゾナ州で、博士論文の仕上げをしていました。そこは砂漠地帯で山と大型キャニオンの密集するところなので、ほとんどの訪米者の注目を受けず素通りされていた地域でした。ニューヨーク育ちの白人女性であるフランスは、初めてこの地方の先住民文化に出会い、博士論文の仕上げの後、是非その史跡を探訪したいという気持ちにかられ、私を誘ったのだと思われまます。



P2. 父の書齋にあった本の表紙



P3. アリゾナ州発行
月刊雑誌「アリゾナ」

一方、そのころ私は東京の桜美林大学で教職に就いておりましたが、ちょうど春休みの始まる時期でした。私自身もインディアン文化について多大の興味を持っておりましたので、二つ返事で太平洋を渡って、フランススの元へ駆けつけました。それから、一カ月半、私たちがブラック・ビューティと呼んでいたフランススの大型の車でインディアンカントリーを回ることになるのですが、彼女は運転に集中する一方、私はその他の一切、即ち音楽をかけ、地図を広げ目的地を探したり、昼になると後部座席に行つて冷蔵庫から材料を出して昼食を作ったり、時にはフランススの要望でマティーニを作ったり、私たちは二人三脚の旅を続けたのでした。

さて、この起こりはその旅の最後の日です。朝早くキャニオンを出発し、ロスへの二日の旅が始まりました。やがて私は、キャニオンのドラッグストアで買った『アリゾナ』という雑誌を読み始めました。これは州の出版物で、いつも奇石や美しい景色の写真を多数載せているので、楽しみに読んでいた雑誌でした。その雑誌で先住民の岩絵が紹介されましたが、特に注目を引いたのは、岩絵の中には数少ないが、幾何的な模様があるというレポートで、そのページをめくったとたん、私は電撃的なショックを受けました。というのはそのページの岩絵の写真は、古事記を研究していた父の書齋の中の、古い本の表紙の絵と同じものだったのです。(P2・P3)

どうして日本と同じものが、太平洋を渡ってアメリカのこの僻地にあるのか。これは何かがあるに違いない、すぐにも現場に戻りたいと思ったのですが、すでに車はロスへ向かって走りだしており、フランスは私をロスへ見送った後すぐさまニューヨークへ戻って、博士論文を大学に提出しなくてはなりませんし、私はそのまま西へ西へと進んで、太平洋を渡り東京へ戻り、新学期の講義の準備をしなければなりません。残念ながら現場へ戻ることはできないままアメリカを離れたのでした。

しかし幸いなことに、その翌年再びアメリカを訪れるチャンスに恵まれました。それはアメリカの南部歴史学会の会合に客員として出席することになったのです。その学会の前に、さっそくガイドを雇って例の岩絵のあるキャニオンへ行きました。現場は、地下三、四十メートルあるかと思われるキャニオンの底地にある巨大な巨石建造物の裏に隠されていたのです。その巨大な石の構造物は、このキャニオンが二つに分かれる分岐点の手前にありました。(P5)

(P7)を見ると足元に小石のように見える岩があります。しかし、小石に見える岩は、実際は私の背丈よりも大きな巨石で、その石の裏側の見づらいところに例の古代文字がありました。しかもこれは、先住民が作ったものではないことがすぐにわかりました。というのは、先住民の岩絵は絵として画かれたものが多いのですが、これは

画かれたものでなく岩に彫ったものでした。しかもその彫り方は、

P4.
二番目の線は装飾用として長く描かれているが、現物は他の四本と同じく短い



ただ棒状の横線が並んでいるのではなく、その字体は明らかに筆を持って習字をする文化を持った国の専門家によって彫られたものでした。

ところで、この古代文字を日本でどのように説明されていたかについて、古事記研究家の荒深道齋翁は次のように述べています。

「これをスサノヲと読む これを日本古来の言霊字によって読むと、『ス』は生命の素、『サ』は榮える、『ノ』は伸びる、『ヲ』は連なる、総じて地球上の生物の誕生、進化、発展を目指した創造神の大精神、即ち究極の愛『至愛』を意味する」

「これをスサノヲと読む 素下靈(すくひ)即ち天地人を一貫して真つすぐに降る創造神の大精神を表す太古文字」

出典 荒深著「神之道」十九ページ
「至愛が『かみ(祖神)』より『きみ(天皇)』に伝わり 「きみ(天皇)」より「おみ(朝臣)」に、『おみ(朝臣)』を経て「たみ(庶民)」に教えられて、上下一貫国民一致に至愛を持って現在に至る」

出典 荒深著「草薙之劍」一八五ページ

一番上の横線は「天」を、次の線は「天の法則」を、その下の四本の線は「社会の四階級、または人類の進化の四段階」を、または、世界の人類の四人種、一番下の線は「地」を表す。

ナバホをはじめホビなどこの地に住む現在の先住民は、古代先住民と違う文化を持っています。しかし、共通するのは、天地創造の自然神を「グレート・スピリッツ」と呼んで信仰している点です。西洋諸国のように人間が創作した神を拝む宗教ではなく、日本古来の神道と同じく自然崇拜であり、多神教と一般に定義されています。

日本の政治学者丸山真男先生は、日本の古代思想の特徴を「統一ある多神教」と定義されています。民俗学者として磐座を研究した酒井将軍も日本のどこかでこの古代文字を見つけて、荒深翁に「この古代文字は横にして読むべき」と手紙を書いています。しかし、荒深翁は天地人を一貫する統一の縦の線が最も重要だとして、この古代文字を縦に読むことを強く主張したのです。神武天皇時代に、この一部が、皇位の階級を示すものとして使われたことがあるようですが、詳しいことは分かっておりません。

何よりも私を驚かしたのは、この文字が先住民の岩絵として描かれたものではなくて、習字体で岩に彫られている点です。習字体を持つ国は、中国と日本です。遠い昔、日本から太平洋を渡ってきた人達が、北米のこの地に残したものと考えられます。

地元の先住民が、ササノヲの古代文字についてどのような言い伝えを持っているかを知りたいと思いましたが、彼らの社会の閉鎖性は外部へもらすことを禁じています。タオスという先住民の保留地近くに滞在した時のことでした。朝早くこの地にある彼らの資料館を訪れました。開館前でしたので、裏から庭へ回ると、ちょうど資料館員をしている女性に出会いました。さっそくササノヲの写真を見せてその意味を聞くと、「四本の横線は白人によつて分裂分散させられた私たち先住民を指し、中央の縦の線は私たちの団結を目指すものです」彼女の名前は「朝日に輝く真珠」だという、前に「大地の母」という名の女性に会いましたが、これは何と素晴らしい名前でしょう。翌年再びタオスを訪れた時のことです。彼女のために、大粒の真珠のペンダントを作り、手渡すべく近くのレストランで待ちました。彼女はどうとう現れなかったのです。後で聞くと、近くまで来ていたのですが、多分外部の人間と付き合いがあることを知られることを警戒しての行為だったことがわかり、私の思いやりの足りなさを悔やんだものでした。

確かにササノヲの古代文字は多様な解釈が可能です。抑圧された集団や民族の団結や独立、また、四本の横線は世界における四人種とその平和的共存、すなわち世界平和を望む創造神の大精神とみることも可能です。

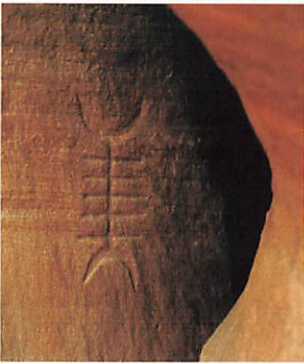


P6. P5 の拡大

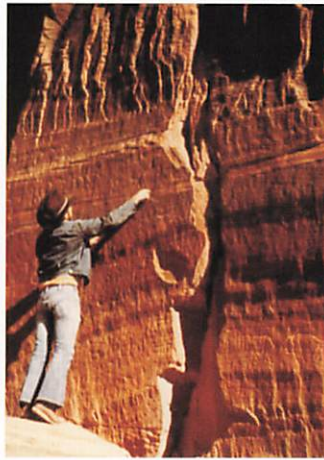


P5. キャンオンの川底に立っているスサノヲの彫られている大巨石

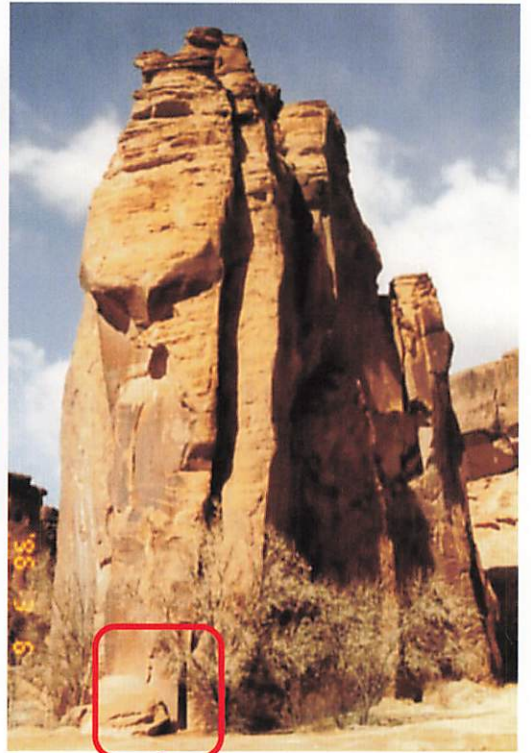
P7. P6 の拡大



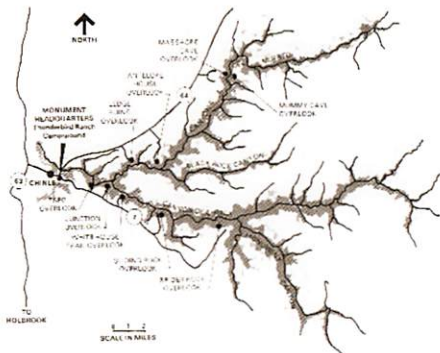
P10. 大巨石に彫られたスサノヲの古代文字



P9. 右の目 怒髪天を突く顔



P8. P7 の拡大



P11. 空から見たキャンオン

二. 左の目右の目

私はアメリカでスサノヲの古代文字を見て以来、荒深道斎の研究に深い興味を抱くようになりました。荒深翁は古事記の研究をされていただけではなく、古事記の思想を持つ古代人が残した岩の祭場いわくら即ち磐座が、現在も残っているに違いないという確信のもとに、九州及び西日本の聖地を訪れ磐座のスケッチをして、「天孫古跡探查要訣」というスケッチブックを残しておられたのです。

なかでも特に私が注目したのは、荒深翁が熊本の矢岳高原にある岩で「オオヒナドリ岩」と名付けられた磐座です。地元では天狗岩と呼んでいます、大きな鳥が翼を広げ、顔は王冠をかぶったプリンセスのような磐座です。これが何処なのか知りたいと思い、営林省を通して探しましたが、なかなか見つかりませんでした、ようやく肥薩線の矢岳駅の傍に住んでおられる「矢岳の古老」と呼ばれていた得田徹氏に巡り合い、案内してもらうことができました。その岩は、矢岳駅から十五分程南へ歩いた所にある山の頂上にあつたのです。道なき道を草を分けてその山に登っていくと、まず目の前に現れたのは、大きく立派な亀石(P12)でした。この亀は頂上へ向かつて深々とお辞儀をしており、そのお辞儀の先に磐座があつたのです。その磐座は絶壁にあり、しかも木に覆われていて、直ぐに全姿を見る事ができませんでした。しかし幸いなことに、営林省の職

員がついてきて、薙刀のような大きな斧で木を切ってくれました。



P12. 亀石



P13. 最初に出てきたのは目だった

まず出てきたのは「目」(P13)でした。大きな目、次に顔、そして全姿が出てきたのです。「オオヒナドリ」というこの鳥は、翼を大きく広げていますが、顔は人の顔で、頭には大きな王冠をかぶっており、荒深翁の説明によりますと、天から生命の素を地上へ持つて降りる鳥で、この冠の中には生命の種子がつまっているということですから。その顔は西南方向にある矢岳山に向かっており、太陽の日射しによっていろんな顔に変わります。王冠をかぶった若きプリンセスのようであったり、日陰になると黒い顔になり、目ばかり光って鬼気を迫る顔にもなります。地元の人の話では、非常に靈験あらたかで、干ばつになると、人々は神社へとは行かないで、真っ直ぐこの



P14. 翼を広げた大ヒナドリ岩

磐座に来て雨乞いをするとい

うことです。実は、オオヒナ

ドリの神が降り立つ磐座は、

冠の頭上となる山頂に造られ

ています。はっきりとした礎

石の上に聖なる巨石がのせて

あり、その岩に神が降臨され

るのです。何度も学生を連れ

てこの山へ行き、不思議な姿

を仰ぎ見たものでした。

ある時、ふとこの顔の向こ

う側の顔はどうなっているの

だろうかと気になりました。

見えているのは左側の顔のみ

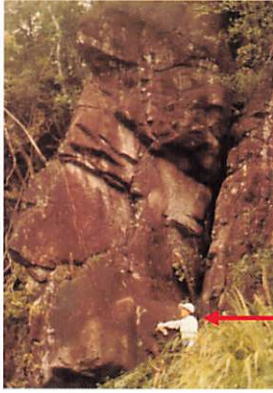
です。向こう側には右の顔が

あるはずですが、果たしてど

うなのか気になり、草や木を

握って何とか断崖を横断して岩の向うへ行ってみますと、何と、た

だ岩があるだけで何も無いのです。目も鼻もなく口もない、形を成
していませんでした。つまりこの巨石は左の顔、左の目を強調して



P15. 大ヒナドリ岩の拡大

いる岩なのです。

なぜ左なのか。左とは何を意味するのかを考えているうちに、ふ

と思ひ出したのは荒深翁が書かれた本の中の一節でした。その本は

神武天皇が奈良への遷都を一応終えられて、一度故郷九州へ帰られ

たことがありましたが、その時の状況を、当時国務大臣をしていた

みちのくに道臣命が荒深先生の自動書記を通して書きおろした本「神武太平

記」の一説です。それを要約すると次のようになります。「日本列島

の形は、トンボが逆立ちをしている。そしてそのトンボの目玉が国

見岳である。これは左の目だが、右の目は遠く地球の反対側にある。

そして今は、その時期に至っていないが、今にこの右の目が開いて、

左の目の助けを求めに来る時が来るであろう。その時には全力で助

けなくてはならない。このことを子孫代々に永く伝えよ」

これは、神武天皇が九州へ着かれて直ぐ大神籬(磐座)へ参拝され

て、今後はどのように国を治めたらよいかと、祖先の神々にお教え

を頂きたいと祈り、一夜国見岳でキャンプを張って休みになったこ

とがあります。その時、夢に神々が現れて告げられたことなのです。

それで、私は、はっと気がついて、アメリカのスサノヲの古代文

字の岩の周辺に、ひよっとしたら何か関連したものが写っているか

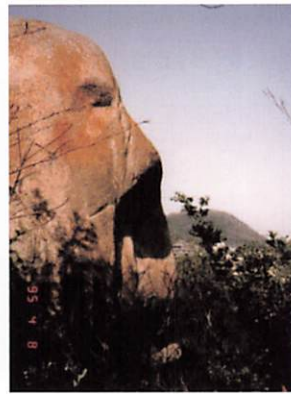
もしれないと思ひ、急いで自宅へ戻り、アルバムを調べたのです。
すると、ありました。スサノヲのしるしの描かれた岩の反対側、つ

まり（P7）建造物の正面の岩に人の顔があります。その顔はよく見ると、髪の毛が逆立っています。目も釣り上がっています。（P9）「怒髪天を突く」とはこのことでしょうか。何かに非常に怒っているということですか。しかし、口がありません。憤慨しているけれどもそれを口で表現することができない、その苦しみを表現した顔です。これが何を意味するのかわかりませんが、現在の先住民は白人によって、百万の人口が数万以下になるまで虐殺されたのでした。そのことだろうかとも思うのですが、これが彩られた時代はもっと遙か昔であるように思うと、それでなく、ただ、ここに右の目があったということとは確かです。そして右の目は非常に怒っている。確かに左の目は日本、右の目は地球の反対側のアメリカ大陸にあったのです。右の目がアメリカ大陸にある、それはこのキャニオンだけではなくて、アメリカ大陸にはまだ発見されていないけれども、スサノヲと同じようなものがあるかもしれません。これは今後の調査に委せる問題として残しておきましょう。

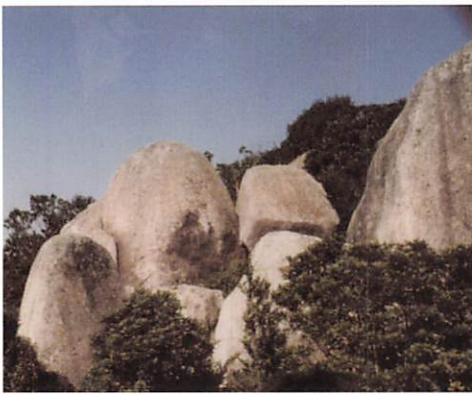
私はその後、九州の磐座（P16）を探索して回りましたが、ひとつ言えることは、目を持っている巨石が他にもあるということですが、例えば、四国の西南端足摺岬、ここには南から来る黒潮に対する灯台の役割を果たした磐座がたくさんあります。その中に、目を持った磐座がありました。（P18）の写真をご覧ください。これは、ただ



P16. 阿蘇の押戸石



P17. 甲山森林公園の左の目



P18. 左の目を持つ岩 足摺岬

の穴のように見えません。この穴は、考古学者は盃状穴と呼んでいます。つまり、盃のような穴という意味で、形状を説明しているだけです。この盃状穴を持った磐がいくつかあって、それには特別な意味を持っているということですか。すなわち足摺岬の盃状穴を見ますと、この穴は左の目なのです。反対の右の目のところを注意して見ますと、目を瞑った膨らみがあります。右の目は瞑っております。左の目ははつきり開いていますが、右の目は瞑っています。

また、兵庫県西宮市の甲山の森林公園の中にある人の顔をした磐をよく見ますと（P17）、左の目は開いていますが、右の目は瞑っています。少し複雑な様

相をしています。他にも左の目が描かれている場合があります。例えば阿蘇の押戸石遺跡の中心的な磐座を見ますと、その南面には天文が刻まれ、西の面にはしつかりと睨んだような形が入っています。これは玄界灘を睨んで、外敵の侵入を防ぐ態勢でいると考えられますが、その下に神代文字のような線文字が入っています。これは、見ようによれば人の顔に見えます。これを人の顔として見れば、左の目が開いていることとなります。

このように、日本は左の目であると昔の人は考えていたようです。それが、どういう意味なのかということとはわかりません。しかし、それらの磐座を見ると、かなり古いもので、人間の誕生の時期を表現した磐座群のある所には、この左の目がある磐がある可能性が多いと、私は見ております。

古代のことは、私たちには分からないことがたくさんあります。無理に間違った見解を述べるよりは、分からないとして、時期を待つ姿勢が必要でしょう。神武天皇陵が公開されれば、たくさんのお事が判明するでしょうが、近代人がそれを正しく理解できるかどうか、全く自信はありません。現代と古代の文化の違いが、私たちには十分に分かっていないからです。

ただ、古代の人の考えは、私たちの想像を超えて雄大で地球大であることが言えます。スサノヲの古代文字は今で言えば、地球平和

を示唆していると思えます。古代の人の考えは、その地球の人の体の左右の目という捉え方です。この広い地球を一個の生物体として、その肉体の左と右というふうに捉えているのです。

私達には、日本とアメリカが一つの生物を持つ二つの側面部分という発想はできません。なぜなら、現在この地球という生物は、今では百を超える国家という組織によって分割され構成されていて、それぞれが自己主張し、互いに国益を主張して争い、戦っているのが現状だからです。

次に、アメリカを含めた大陸の太平洋側には、昔日本人が上陸し、文化的な影響を与えた遺跡が幾つも残っています。例えば南米ペルーの北のエクアドルの太平洋岸にあるバルデビアという海岸の町には、五千年前の立派な土器がたくさん発掘されました。調査の依頼を受けた北米国立スミソニアン研究所の考古学者は、直ちにこれが縄文土器であることを見抜きました。しかし、日本は遙か太平洋の彼方です。果たして五千年前に日本人がこの地にやって来たのだらうか、信じ難いことです。ところが、なんとその答えを太平洋が証明してくれたのです。バルデビアの長い海岸線を散歩していた研究員が、海岸に打ち上げられた漂流物の中に流木があり、その中には、日本から流れて来た木材があったのです。つまり、太平洋の海流は日本の木材を、黒潮に乗せて北上し、ついで東へと時計回りに運ん

で北米、中米、そして南米のバルデビア湾へと運んだのでした。これをもって彼らは、五千年前にここを訪れた日本人の旅行者たちが、多大の文化的影響を残したと結論し、発掘した縄文土器の写真を持って来日し、土器の関連地区をも訪れて、自分たちの結論に自信を持ったのですが、日本の考古学者達は、これを認めなかったようです。

数年後、ペルーへの調査の途上、私はワシントンDCのスミソニアン研究所にバルデビアの調査にかかり、現地の縄文土器について一度ならず日本へ来られた研究員に会う機会がありました。

「この三十年というものは懸命に説得したのですが、日本の学者は認めようとしないので」と残念な思いを表明されました。エクアドルの博物館には、縄文土器が少なからず陳列されていて、その堂々たる姿は、古代日本文化を体現していて、見る者に感動を与えます。しかし、その周囲にこれに関する何の説明も、その名称も産地の記述も全くなく白紙です。考えるに、日本の学者が同意していないことが理由でしょう。私は、考古学が専門ではないので、日本の学者の頑固な拒否が解りませんが、そのために、古代における素晴らしい東西文化交流の事実が隠へいされてしまっていることを非常に残念に思ったものでした。

また北米のロッキー山脈のふもとユタ州バーナル市の博物館には、

十体ほどの土偶が陳列されていますが、これらは、外来の人達が造ったものと考えられます。外来というと、太平洋の彼方、日本や中国から来た人達のことです。なかでも土偶を造る民族は日本で、中国では秦の始皇帝の兵士を土偶として造ったことはありますが、多様な土偶で有名なのは日本です。日本から行った人達が、何らかの理由で土偶を造って残したと考えられますが、そのような発想は現地の考古学者にも日本人にもありません。実際に、エクアドルの美術館やユタの土偶を見ると、土地の文化と違った遠方からの文化的影響を感じさせられますが、これを調査する学者の頭には、そのような発想はありません。

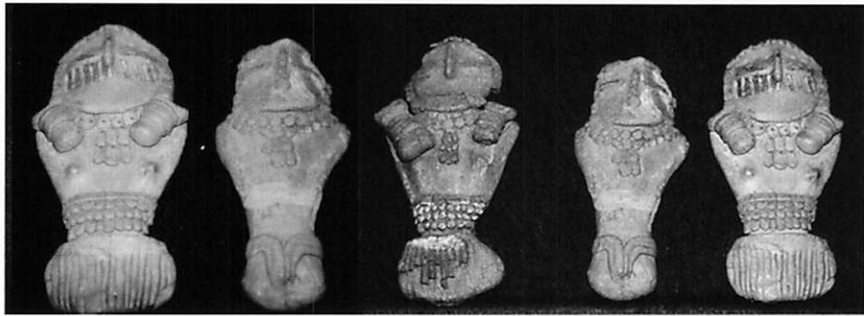
私は、技術とそれを駆使できる人間が揃っておれば、文化の移植や伝播は可能と考えています。その土偶と全く同じ土偶が見つからなくとも、土偶を造る技術を持つ人間がおれば、同種の土偶を造ることは可能でしょう。異国にあつて材料が異なるか、または造る目的や状況が異なれば、土偶の形や色合いなどは、その地に独特なものになるのは当然といえましょう。

全く同じ土偶が発掘されなければ両者の文化的関連性はないという考え方は、いささか機械的すぎると思います。ユタの土偶を造った人達は、地元の先住民の話によれば「マキ」とよばれた人達であつたということです。土偶のみならず、ある時期に、それまで無かつ

た文化が突如として発生した場合には、視野を地球大に拡げて、東西及び南北文化交流の可能性を探查してみる必要があります。しかし、そのような見直しの前には、まず私たち近代人が持っている古代人に対する偏見と誤解を変えなくてはなりません。その第一は、「近代人に出来ないことが未開な古代人に出来るはずがない」との確信です。太平洋をカヌーや丸木船のような原始的な小舟で渡るなどは不可能と信じて疑わない日本の考古学者は、南米エクアドルのバルビアの長い海岸に打ち上げられた流木の中に、日本を出発して黒潮にのり、ついで太平洋を時計回りに流れる海流にのると嫌でも太平洋の海岸に着き、その後はさらに北米から中米、そして南米と南下してバルビア海岸に到着するのです。このことを古代人は知っていたのです。しかし、近代人は信じません。羅針盤もなく何の機械もない古代人が南太平洋を横断して、南米に至るのを近代の考古学者は、カヌー船(ホクレア)を作って成功しています。また、多くの移民が南太平洋諸島から北上してハワイへ移民しています。私たちは考え方を逆転する必要があります。

「近代人にはできない。」

しかし、古代人ならできただろう」と。



P19. 北米ユタ州 ピリングス土偶

《参考文献》

中島和子 著

・「古代における政治と祀り」(三)

北米ユタ州ピリングス土偶と古代

先住民フレモント(一)及び(二)

・「京都精華大学紀要」十二号及び

十三号

・「黒人の政治参加と第三世紀アメリカ

カの出発」中央大学出版部発行

インカの豚



写真 2

これはアンデスの豚です。この豚は抹殺されそうになったのです。私が保護しています。アンデスでは豚は五〇〇年前スペインが持ってきたということが定説です。



2000-8 Valley of Kings-16 Rameses-1 EGYPT

写真 1

二〇〇〇年イギリスを中心とする王家の谷調査隊に、地中探査リーダーで参加しました。閉鎖されているKV16に調査で入ったときその壁面に圧倒されました。このコンドルは最も美しく、お願いして特別に許可してもらい、一枚だけ撮影しました。私の生涯の一枚です。



日本とアンデスにみる巨石文化の共通性

渡辺 広勝

まず皆様に見ていただきたい写真があります。

そう豚の写真です。豚の土偶です。

これはアンデスの豚です。この豚は抹殺されそうになったのです。私が保護しています。

アンデスでは豚は五〇〇年前スペインが持ってきたということが定説です。

しかしこの豚は、そのときより数百年前の神殿の壁から発見されました。

今日はこの豚が大切なお話の中心に成ります。

私は地中探査リーダーの技師で、エジプト・中東・太平洋・アンデスなどの遺跡の探査調査を行って来ました。

私が不可思議な歴史に興味を持つようになったのは、空中庭園パピロンの都跡で写真3の扉を見たときからです。

菊花紋に良く似たこの文様は十八枚の紋様です。実は、この紋様が何であるかを知ったのは、カイロの動物園で、子供たちの絵を見たときでした。

彼らは一様にこの紋様を動物の上に描いていました。これ何なのと聞きました。

子供たちは得意に言いました。「太陽だよおじさん」。はっと気がつきました。

そうです、砂漠で見る太陽はこんなふうに見えます。日本では光が直線ですように現されます。



写真 3

東欧などでは、ユラメクように表現されます。

太陽の表現さえ生活・自然環境で違うことを知ったのです。

さて十数年前さそわれるまま、アンデス高原の都市ワラス近くの家庭にホームステーしました。そして、アンデス第二の高峰ワスカランのヤングヌーコ(*）溪谷に行きました。

すばらしい景色に圧倒されましたが、私はそこが、世界遺産自然部門の土地であることを知りませんでした。しかし、此処が巨大な石を使った遺跡であることに気がつきました。



4 報告該当位置 ペルー



5 ワスカラン峰

それらはまったく知られていず、未登録の遺跡だったので。その後、地元の考古庁とともに調査しました。以降東海大学アメリカ

文明学科で調査をしています。発見はテレビで放送され、中島和子先生の知るところとなり、お電話を頂きました。

その後、私がイワクラという分野の研究に入り込むことにもなり

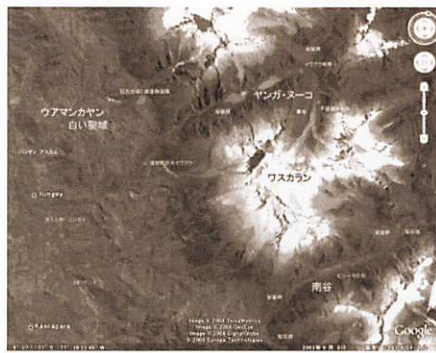
ました。

写真7はヤングヌーコへ入る谷の入り口です。

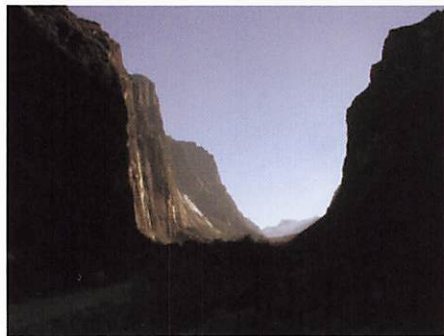
* (ヤングヌーコは公式ガイドではジャンガヌーコです。)



8



6 衛星写真でみるワスカラン ツミに似ている



7 溪谷西入り口から奥に向かって

写真8は、溪谷入り口の谷にあるイワクラの状況です。そこが本来のインカ街道です。

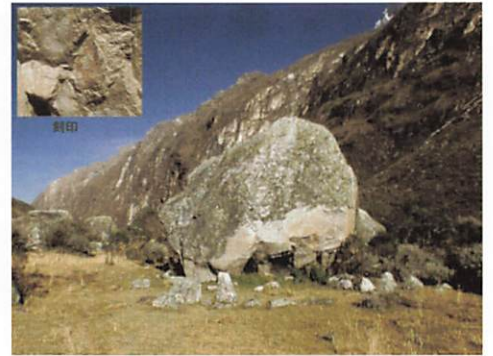
写真を撮っている場所は

4000mで、自動車のための新道です。溪谷のイワクラ群の標高は、3500mくらいです。

石の大きさも特別ですが、配置された状況も何らかの意味が、あるものと、興味があります。



9 巨石 周囲に配置石と刻印付き



10 巨石 周囲にサークル状配石

溪谷の中に入ると、多くの巨石を見ることが出来ます。その中には、刻印を描いたものもあります。十数年間殆ど毎年訪ねました。写真はその一部です。

ペルー南部の精巧な工作石と異なり、此処では荒削りです。しかし、形の類似が目につくようになりました。みな舟の舳先のような形態を示し、そこは、斜めに削られているのです。なぜか多くの謎が生まれます。植物などに囲まれていない多くの巨石は、見る目を養うことになりました。やがて、日本のイワクラ調査の中で、アングスの巨石状況の良く似た様々の石を見ることになりました。

そして、十和田湖畔の奥人瀬溪谷や白神山地に、いまだ知られていないイワクラ群を発見しました。

また、南の島ではパラオ、フィリッピン、グアム、サイパン、ソロモン、ニューギニアなどの状況も見ました。以下写真でいろいろと説明します。



11



12

写真11は壮大な石墨地帯です。斜面には無数の段が構成され、巨石の配置も見られます。
写真中央には円形劇場のようなサークルがあります。おそらく何らかの祭祀遺構と見られます。写真上段の左右のラインはインカ道です。
写真12はサークル状の配石です。地震や家畜移動のために壊れたかもしれません。

中央の石に乗った円い石は付着したコケの状態から、古代そのままの姿です。それは、最短で約六〇〇年、それ以前からのものです。この場所にはこのような配石構造遺構がインカ道に沿って並びます。
 (場所 ワスカラン南溪谷 — 仮称 — 支枝溪谷アキスコーチヤ)



15 マウンドがあり階段もある。巨木が見える



13 巨大な石舞台と石列



16a 巨木はガンジュワルという神樹と見られる



14 石の家? この溪谷ではいたるところに



16b 巨石 白亜の聖域



17 巨石 南溪谷

写真16は、白亜の聖域と仮称した地区での巨石です。中央の巨石は、マウンドの上に有り、石の周りには、小型の石で区画が示されています。巨石は、明らかに人為的により、形態が形作られているのを見られます。出来た当初は、真っ白に輝いていたかもしれせん。

写真17は、高さ的にはいまのところ最大級です。15 m位あると思います。

下は、えぐられて部屋になっています。写真分析では、黒いライオンは、そのように出来るように、天上部に鉸脈部分を持った石を利用している可能性があるのです。

写真18は、最初に確認したメンヒル(写真29)のある広場です。インカ道を構成する石塁、何らかの施設を示す石塁など、極めて多くの巨石が取り巻いています。

写真19は、二つの巨石と配石の状態、周囲の平原の環境が見て取れます。写真を撮っている足元も、巨大な巨石の組み合わせによる高台です。



18 ヤングヌーコ中央祭祀遺跡



19 ヤングヌーコ中央配石広場

写真22は、左写真景観から、周りの配石状況を見て接近しました。右写真で、右下の弧状の石は巨石から取れた物かと思いましたが、大きさも材質も多少異なるようです。巨石の弧状部分は、角を加工した跡が見られます。水辺にあることも竜神をイメージさせます。



20 境を示す配石群



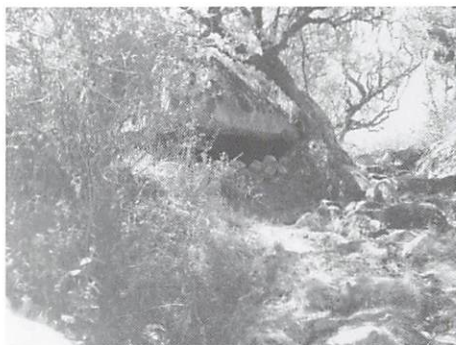
21 石皿右脇の丸い石と組と見られる



22 水辺に配置された動物をイメージさせる巨石

皆さんが一応に興味を持っているのが、アンデス民族と日本民族の関係です。

モンゴロイドという人種的な特徴が、太平洋をへだてた二つの民族についての、接続点にロマンを抱くからでしょう。



25 インカ道 道の脇にある岩屋



23 インカ道 日本の古道を思い出させます



26 インカ道 脇にある平石



24 インカ道

太平洋の島々には、マウンドや烏帽子形(うしぼしがた)の山、そして数々の伝説が埋もれています。

しかし、それらは現在の人々が伝えるもので、その遺構を構成した人々は、まったく異なる人種の人々の集団によって作られたのではないかと見えています。



27 大蛇伝説のパラオの巨石



28 壮大なマウンド 時期不明

写真29と30は、代表的形態のもので、同じ形態ながら29はやや尖った表現で30はきれいに丸くしてあります。29は、正午になると正確なリングの影を作ります。

30は、民地の片隅で偶然に見つけました。敷地が円形になっていて、ここは、太古祭祀区域だったことが分かりました。



29 ヤングヌーコ祭祀場のメンヒル 1.2m



30 秋田県大湯のメンヒル 0.8m

多くの石を観察していて、ある種の方向性が見えるようになりまし。奥入瀬溪谷に行ったとき31の舟形石に似た32のような石を見つけました。状況を調べてみると石の大きさは異なりますが周囲の配石も似ています。調査しました。

写真33はその一組です。磐座としての考えがまとまったイワクラです。

この磐座の写真を見てください。右側根曲がり竹と言いますが、その笹が、円形に見える範囲に、浸入してきていません。また、入り込んだ竹も、生長が周辺と異なり、あまり伸びていません。

磐座の周りは、特殊な植物以外、地生えのものは成長しにくいようです

アンデスでも、このような場所が多く有り、不思議に思っています。時間は悠久のときを過ぎているのです。なぜか、地中がどのようになっているか、とても興味もたれます。



31 ヤングヌーコの舟形石



32 奥入瀬溪谷の舟形石



33 奥入瀬溪谷の磐座 左に見えるのは写真34 ウタキ形巨石 周りはシダとブナ樹
写真33はフォーラム会員の尾崎一夫氏提供



34 ウタキ巨石組 人が立って通れる

35 サークルの入り口にある加工石

写真36は神殿とみなされる空間の遠景です。斜面は急で37の近景に有るように全体部分は斜面の下方から撮影しなければなりません。36写真の上方部に二つのふくらみが見えますがそこにも巨石上部を観察しています。斜面に構築された巨大な空間が存在することが考察されます。この観察は白神山地での同種のもの発見に繋がりました。



36 ヤングヌーコ神殿遠景



37 神殿近景



39 白神岩屋A天井部分



38 白神岩屋A

す。従って、組み石が自然か人為的か人為的か自然か人為的かを、見極める必要があるのです。自然岩そのものを、信仰の対象としてイワクラを構成している場合は、信仰としての証拠が無いと説得力は難しいと思います。

写真38は、外側形態も内部天井の形態も写真37に極めて類似していました。
このような岩屋を幾つも見つけることになりました。それらは、不思議と一つの形態を示す峰を仰いでいました。
日本の磐座で人工的な証拠を探すのは大変骨の折れることです。なぜなら、雨と植物によって殆んどが浸食破壊されているからで



40 白神岩屋Aから三蓋山の尖峰

白神の山々は、人跡未踏の思いが強いのですが、此処では歩いてみるといたるところに、人の手の入った大地の構成が見られました。白神のイワクラ群は、荒削りながらイワクラとして、人為的な工作の表現されるものとして、楽しく観察することが出来ました。

アンデスも日本も、イワクラを構成する巨岩の中に動物をイメージさせる石が多くあります。亀石など、石を比較的簡単にイメージ加工して出来るものとしては、水と絡めて、興味深いものがあります。

此処では、見事な造形の動物のイメージを見ることが出来ました。尻尾もあり、目とする窪みもあります。狸石と名をつけました。そばには、祭祀段がありそこから見る三蓋山(サンガイ山)は、雄大です。

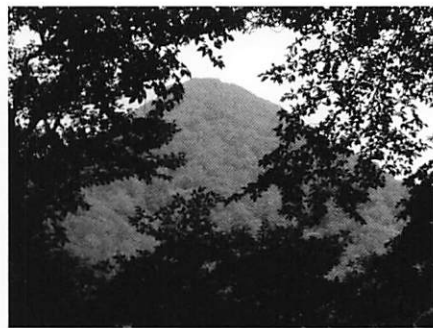
周囲はブナ林です。ブナ林のハイキングコースでもあり、祭祀段は記念撮影の立場に成っています。

このような場所をどのように保護するか、何もしないほうがいいのか、幾つかの事例から悩む事になります。



41 白神山地 たぬき?石

写真42は白神イワクラが信仰に求めた三蓋山です。このような山を太古の人々は信仰の対象としてあがめていました。遠くマチュピチの山々、また世界各地にみられます。

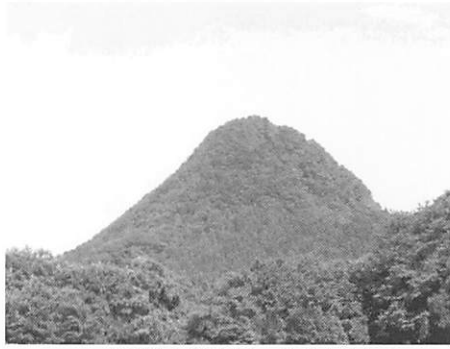


42 狸祭祀段付近から見る三蓋山

私は、日本で三蓋山のような鳥帽子山、甲山のような形の山を研究しています。(写真43)

それもアンデスで見つけることがあります。

あるとき、愛知県豊橋市田原町にある笠山に似た山を衛星写真でワスカランの近くに見つけました。二〇〇七年十一月調査に行き



43 典型的な鳥帽子山 仙台市太白山



44 土レンガのピラミッド ペル

写真43は仙台市に近くなると見ることが出来ます。頂上にはイワクラの跡が残っています。ペルーのピラミッドも遠くから見ると鳥帽子方に見えます。鳥帽子形のイメージは遙か遠い太古の思想が残されていると思っていま

まいます。学者は、巨石人工物説を嫌がります。イワクラ学が、なかなか認められないのは、自然石の形態が強いからです。特に、日本のような雨が多く、植物の繁茂しやすい土地では、人工痕も消えてしま

まいます。そして、さらに近くで、白い巨石の神殿群を見つけました。そのなかに、長年捜し求めていた人工的工物の、完全な状況のある石を見つけました。(写真45)



45 舟形の巨石 高さ約10m



46 見事なアーチの加工痕

アンデスには王は巨石の下に眠るという言い伝えがあるのです

さて、あとは運搬です。こんな石をどうして運んだのか、それが解決しないかぎり、まだ認められない世界が立ちほだかります。

白い巨石の後ろには、マウンドがありますが、そこに斜面の上のほうから溝がついているのが気になりました。衛星写真で見るといく筋か確認できます。

そうだったのか、と気がつきました。

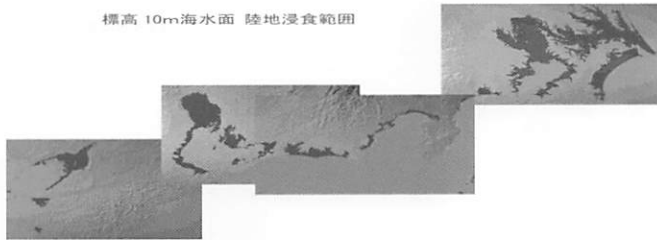
イワクラ配石遺跡群は、アンデスでは二五〇〇mくらいまでしか見られません。

ひよっとしたら、氷の道を使ったのではないかと感じたのです。氷の道なら巨大なものも、重量のあるものも動かせます。



47 これはワスカラン往還でみるイワクラ群である 標高は約 2500m
これより下に巨石の配置したサークルは観察できない

東欧の巨石や、イギリスの巨石文化についても説得できません。また、日本の太古を調査しても、明らかに氷河と共存したと考えなければならぬことが多いのです。日本にも氷河期はありました。高千穂さえ氷河の影響を受けているのです。そう、太古人々は氷の道を作り巨石を運搬し、いろいろなモニュメントを創ったのです。



48 縄文海進期の近畿・東海・関東海岸線 カシミールで作成 Terr

皆さんは、アンデスの縄文土器と、日本の縄文土器の類似性を聞くと思います。学者は、一笑に付しますが、なぜでしょう。きつと小船に乗って海に出たことが無いのでしょうか。カナドで大洋を渡っていく家族を見たことが無いのかもしれない。また、荒海の太平洋の真ん中を、頭に描いているかもしれません。

古代の人々は、冒険的で生活圏を求めて、果てしない世界へ旅立ったのです。人々は、カナドをあやつり、船団を組んで何処へでも行きました。北の海が氷河に、閉ざされる海退の時代は、南回りでアンデスへ、海進の暖かい頃は、千島・アリューシャンなど北の島々を伝わって、アラスカから北米へ、簡単に行くことが出来たのです。

それは、近氷期ウルム氷河期だけでも2万数千年、悠久に時の流れの中です。

氷河期の話を少しします。

図48は縄文海進期といわれる六〇〇年前頃の温暖期の海水面位置です。

海水面は今より想定平均海水面が一〇m上がっていて、今の各平野は海の中です。

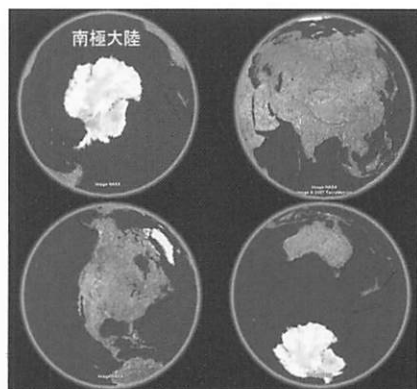
縄文海進といわれています。三内丸山やその他の縄文中・晩期遺跡の発達した頃です。



49 海退期の日本列島 地質構造発達史より

写真50は、南極大陸の大きさです。この氷が全部溶けると、海面は数十メートル上がるといわれています。逆に、氷河時代大陸と北極海が厚い氷で閉ざされると海面は下がります。

図49は、約二万年前の日本です。陸地が大きく広がっています。このように、氷河期全盛時代、海水面は百数十メートル下がっていたといわれます

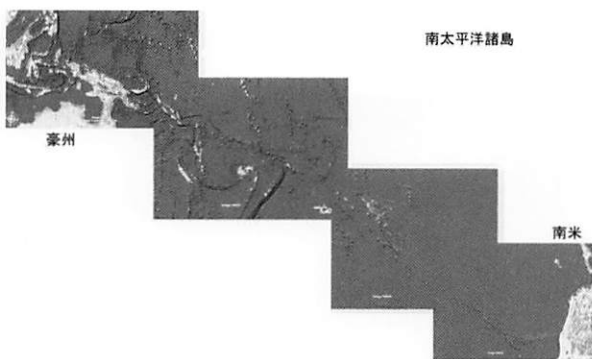


50 南極大陸の大きさ グーグルより

今も海水面下浅い陸地が無数にあります。その陸地が島となり、陸続きとなり太平洋のルートは今と一変します。伊豆諸島は南太平洋に向かって多くの島々が南太平洋まで並びました。

南太平洋も南米大陸に向って、無数の島が並んだのです。

(図51参照)



51 南太平洋諸島 グーグルアースより
150メートル海面を下げると広大な島礁大陸が出てきます

黒潮の流れも変わりました。伊豆諸島から南に向かって、急速な「黒瀬川」が出来、南への船旅は、意外と早く行けたのです。氷河期の地球は、気候が比較的安定していたと考察できます。太古の人々は、小船でも充分大陸間の行き来が出来たのです。海面は今よりはるかに低く、ムー大陸といわれる伝説の大陸は、今の海面下の陸地が現れた、島礁国家群だったと思われる。南米大陸への中継地点としても栄えたと思われる。

最初に示した豚。足の短い豚は氷河で閉ざされベーリング海峡など渡ることは出来ません。

豚は熱帯系の動物です。猪が雪国に居ないことでも分かります。アンドレスの豚は人とともに舟で渡ったかもしれませんが、元々いたかもしれません。最近ボリビアの太古の遺跡からも豚の土偶が発見されているのです。

日本とアンドレス、ユーラシア大陸と南米大陸は遠い古代、太平洋の無数の島々を結んで、充分なつながりを持っていたのです。



52 2007年6月 夕闇のソロモン海をはるかな島に向かって漕ぎ出していく2隻のカヌーを見送っていました。そのときの写真をを使った創作イラストです。渡辺広勝

質疑応答

司会

.....
どうもありがとうございます。それでは、ご質問に入らせていただきます。

小山

磐座研究会の小山です。ご専門の地中探査はどのように役に立つのでしょうか。できれば我が村でやっていただきたいと思っております

渡辺

ありがとうございます。今仕事がなく困っておりますので。(笑)

磐座そのものに、地中レーダーが役に立つかどうか分かりませんが、遺跡調査という面では、お渡ししている資料に書いてありますように、色々調べております。

例えば、山梨県でたくさんやらせていただいておりますが、山城の調査とか、平地の城の調査、それから屋形跡の調査、先だつてやりました屋形跡の調査では、その屋形が、何を考えてそこに屋形を造られたかというのが、レーダーのデータから導き出されるんですね。例えば、船便を利用するために、その屋形が発達した。そのようなこともわかってきます。これは、データを見たからばつと分かるものではなくて、複合的、多角情報処理というのをやります。実は、私は海外へ行くと、電波や情報処理をやるため、スパイ扱いされたり。情報処理をまともに訳してパスポートに申請したものですから、拘束されたりしたこともありました。レーダーのデータで色々判断する素材は見つかりま

す。お話しすると長くなりますので、まだ別の機会で、ゆつくりお話しさせていただきますと思います。

森

名古屋市の森と申します。大変発表に感動致しましたが、渡辺さん、何歳ぐらいで、どのような動機でこういう道へ入られたか、お話しいただきたいと思います。

渡辺

お手元にありますように、私は一九四二年、昭和十七年の生まれです。ここに行くためには、様々な経緯はございますが、同時テロ多発以前でしたか、ペルーにいきまして、ワスカランを見ました。それがTBSで放送されました、中島先生から勧められて、お宅にお邪魔いたしました。その辺からこの磐座というのが、日本にあるんだというのを、もう十年ぐらい前からですか、ちよつと思ひ出せませんが、ただワスカランにつきましては、遺跡として見ておりましたので、発見してからも十年以上、毎年一、二回は向こうへ行つて調査いたしております。

前田

神奈川県から参りました前田と申します。非常に面白い磐座の紹介で、有難く聞かせていただきました。最近飛鳥昭雄が、ムー大陸と日本の関係を述べた本を出しておられますが、その時に、アジア地区と南米とか、北アメリカとの繋がりとというのは、単なる北の方のルートと通じて、氷の上を通つて行つたという説ではなくて、海を通つて行つたか、あるいは別のルートで行つて交流があったのかと、スンダ大陸は減つて横を見ながら、船で行つたか、歩いて

渡辺

行けたのかどうかわかりませんが、一万年以上前だとそのようなことも可能だったのではないかと思います。

そのとおりでございます。私の研究しているのもそこにありますし、時間があれば、中島先生もその件はお話ししたかったと思います。今のムー大陸のお話なんですが、海面を下げますと、この辺の島が大きくなります。実際に行つて調査いたしますと、島が出ていの中に、ずっと陸地がいつぱいあります。それが、出てまいります。例えば沖繩沖のヤエビシみたいなものが出てまいります。ですから、私はそれを、トウショウウ国家だと言っています。北は寒くて居られません。しかし、北の人達は氷河と共存していたのではないかと。ですから巨石を運べたのではないかと。南の人達は海洋民族として、海彦ですよね、海で生活をして、渡り歩いて貿易をした。ですから、氷河時代だからといって馬鹿にしてはいけないという話になると思ふんですね。海を使つて行き来していたと思います。では北から行けないかという、それは行けたと思います。ベーリング海峡を渡つたというのは、ひとつの定説になっていますが、それは固定定説でいいと思います。アルーシャン列島もありますし、そこを伝わつて行つた人達もあると思います。ただ、豚は雪の上が耐えられないので、やはり南からの話の方がいいのではないかと、そういうふうに通つております。

富田

高知県の土佐清水市から来ました富田と申します。一番

初めにいた豚は非常に感激をいたしました。といいますのは、学者は既に新しい発見は認めない、これなんです。高知県で私たちが巨石をやりだした時に、その当時一番言われたのは、高知大学の学者さんで、高知県では考古学の権威者といわれる方が、「あれは自然だ」ということばかりを言うんですよ。私達は、自然九十%、信仰十%だと言っておりました。やはり日本自体も、三内丸山遺跡が出てくるまでは、色々な形でいえば、日本の縄文時代についても、かなり間違えた考え方をしている、新しい考え方を言ってもなかなか取り合ってくれなかった。それから、遺跡発掘の時代の捏造にしても、他の学者が全然取り合わなかった。一人の学者が言っても取り合ってくれなかった。そういうような風土というものが、そういう世界で生きている人達の中にはある、自分たちの権益を守るため、生活を守るためだとは思いますが、やはりその辺を考えていただくと、渡辺先生の取った行動というのは、これから正しい歴史に持っていくための大きな行動ではなかったのかなというように思っております、感激いたしております。頑張ってください。

鳥飼

うんですね。ところが、土人という言葉は使ってはいけませんが、下の連中の言うことなんか信用できるかというのが、学者の言葉だそうです。それは、今後そういうことをやる人達に改めてもらわなければいけない。磐座も自然のものを信仰したのもあるでしょうし、人間が造ったものもあるんですが、長い年代の間に風化しているわけです。そうすると、人間が組み立てた所が分からなくなってしまう、自然のように見える場合もあるわけです。ですから、皆さんが磐座を研究する時に、どこをどう見るかというのを、的確に覚えていただいて、「ここはこうだから、先生おかしいんじゃないの」というぐらい言ってもかまわないと思うのです。(拍手) 私は平気で言っておりますから、そのために、一部首になつているところもあるんですけども、そのようなことをやっておりますので、何か機会があればいつでもお申しつけくださいませ。よろしくお願いいたします。

渡辺
私は色々旅をしております、そういう機会に沢山恵まれております。例えば、エジプトでナイルオオトカゲというのを見つけました。ナイルオオトカゲは、二メートルぐらいあるんですが、エジプトの学者の間では、これは絶滅したんだということになっています。ところが、私はそれを見つけたし、写真も撮りました。地元の人達はいると言

私はペルーで生まれて十二歳までいたのですが、今の話は非常になつかしく思います。もう年ですので、私は行けませんので、お願いしておきたいことがあります。ひとつは、マチュピチュのことです。クスコという町から電車でマチュピチュまで行きます。クスコは高山病になるけれども、マチュピチュは高山病にならないわけです。そういう所で、私は3回ぐらい行きましたが、お願いしたいのは、クスコの郊外に大きな真四角な巨石があります。今言われたように、氷河とか、そういうもので運んだかわかりませ

んがあるんです。これはクスコにあるんです。色はどす黒い色をしています。物凄い四角い巨石です。その横に、水が出るような人工的なものが造ってあります。それから、もうひとつは先ほど言われた、地上絵はまだ解明されていないということなんですけれども、どうしてあのようものができたのか謎になっています。以上です。

渡辺

今のお話の中で、マチユピチュとクスコに関しましては、私自身がまだ行っておりませんので、何とも申し上げることができませんが、地上絵、いわゆるナスカラインといえます。ナスカラインにつきましては、今度ホームページにも出させていたいておりますので、ご覧になりたい方は、そこで見ていただきたいと思います。

〇〇

氷河のこと馬鹿にするな、全くそのように思いますが、南の方はいいんですが、北の凍っているような所に巨石があるじゃないですか。氷を滑らせて、わざわざ持っていて造るとおっしゃってましたけれども、私もそう思いますが、彼らにとつて磐座の巨石でもいいんですが、それはどういう意味があるのか、直感的に思うことがありましたら、教えてください。

渡辺

ひとつは、やはり石に対する何らかの信仰があったと思います。もうひとつは墓ではないかというのがあります。それからもうひとつ、これはまだ確証がなかなか取れないんですが、アンデスもそうなんですけれども、鉱山史に関

係するのではないか。鉱山なんですけど、古代、金、銀、朱といいますが、本来、朱、金、銀だと思っっているんです。朱は死者が旅立つ、埋める時に塗る大事なものです。私はシカンという墓を島田教授とやっておりますので、そこで朱がいつぱい出てきています。朱は物凄く大事です。日本でも、金何たる、朱何たるという言葉がございしますが、朱は大事だと思えます。それを取ったのかなというのもあって、いろいろ調べるんですが、今一納得がいかない。その一万数千年ぐらい前ではないかなというのをずっと見てきますと、何か別な鉱物を探っているのではないかと思えます。日本で過去に採れた鉱物なのに今無い鉱物もあるわけです。例えば磁石石というのが今ひとつも採れないわけです。どこで採っていいかわからない。あつたというのは、古い図鑑には載っているんですけども、今の図鑑には載っていないわけです。そういうのを見ますと、何か我々の知らない鉱物を探るために世界中荒らしまわったのではないかなというのがあるわけです。この前ソロモンに行ってみますと、ソロモンのような熱帯のジャングルの中でも、巨石ではないか、何か取っているなというのがあるんです。ジャングルに阻まれていると、ゲリラに襲われたものです。そういうことで、またこれから色々やっていきたいと思っております。(拍手)

渡辺 広勝（わたなべ ひろかつ）

- ・横浜市在住 株式会社光電製作所
- ・地中探査レーダー開発部門…一九七五年頃より
- ・地中探査レーダー技師…一九八〇年より
- ・国内遺跡…亀虎古墳など古代遺跡調査から各地域郭調査など各教育機関と連携調査
- ・海外遺跡…エジプト王家の谷（イギリス隊）各大学、研究機関等を支援。西アジア各国、パキスタン、太平洋地域、アンデス、ペルー、ブルガリア等。
- ・イワクラ研究のきっかけ…二〇〇二年、ペルーワスカラが壮大な遺跡であることを確認し、テレビの特集に取り上げられた後、中島和子先生のお問い合わせをいただきその縁でイワクラ研究を始める。



聖地大阪とイワクラの呪術的空間の

構成について

橋本 完

「はじめに」

イワクラ（磐座）学会、会員の橋本完です。この五月末にイワクラフォーラムを、大阪歴史博物館で企画させていただきました。

その次の日に「聖地大阪とイワクラ」というテーマで、現地探訪会をさせていただきました内容に、もう少し考察を加えて皆さんにご紹介したいとおもいます。



一 聖地大阪の呪術的空間の構成

「石山の天神鼻」

大坂城のあるところが、かつて、石山といわれていました。右側の地図が室町期の古地図です。(図1) 左の図のように上町台地全体が描かれている古地図があります。この先端部分が石山に当たります。(図2) 古文獻を調べていますと、この先端を「天神鼻」と示された古地図があります。

「呪術的空間の構成について」

呪術的空間の構成についてお話しをする上で、一つお断りしておかなければなりません。イワクラフォーラムでも顧問の平野貞夫先生から頂いたご意見の中になりましたことを、最新のイワクラ13号に掲載させていただきました。その中で、オカルト的、胡散臭いとみられやすいことなど、科学的に証明できないことや、数値化できないことを探求する学問が、イワクラ（磐座）学会の一つの使命だというお言葉を頂きました。これを前提に、お話をしていきたいとおもいます。

「大坂城周辺の聖地」

大坂城の呪術的な空間の構成の背景になる考え方について、お話をしていきます。

大阪の地形のお話ですが、これが6世紀から7世紀時代の大坂城周辺の地形図です。この部分が大坂城のある部分。その下に史跡難波宮があります。この標高のポイントからみすと24メートルあります。こちらが22メートルあります。現在、国立大阪病院があるところが多いです。(図3) このように聖地というのは、三つの山の頂をもつところが多いです。

半島と日本のつながりで、燈台のような役割を果たした沖ノ島という島が、九州の宗像市にあります。この沖ノ島に宗像神を祭っています。沖ノ島にも三つの山の頂がありまして、各頂上の下に祭祀をした跡が残っている。そして、一つの島で完結するのではなく、沖ノ島、陸地の向かいにある大島、陸地に上がった宗像大社と、三つの関係で聖地がかたちづくられています。大和朝廷の政権ができ

る頃に、近畿地方に入ってくるのですが。その聖地の痕跡の事例として、京都の伏見稲荷大社があります。伏見稲荷の稲荷山の頂上に三つの塚があります。この三つの塚がそれぞれの聖地として祭られています。古墳時代から祭られています。そして、現在、信仰の対象として祭られています。

伏見稲荷大社と非常に関係の深い、京都の西側の嵐山周辺にある松尾大社があります。この松尾大社のイワクラが最近、一般の方も参拝できるようになりました。私も先日参拝しに行ってきました。一番メインのイワクラと、あと二つ祭祀の対象になっているイワクラがあります。このイワクラは、三つの石の配置からできています。

それから話は飛びますが。大坂城の予想断面図のこの下の線、これが元々の石山の地山だといわれています。(図4) この上に大坂城が築かれているわけです。豊臣の大坂城は、大坂夏の陣で滅びます。滅びることによって次に、徳川が新しい城を築きます。その時に盛土をして重ねている。ですから、今の大坂城の遺構(石垣)は、徳川時代の本丸の意匠でできています。これに手を加えられて、現在の大坂城ができています。だから、三層の構造から見えない力がシンクロして、共時性の中にあらわれてきたのではないかと考えています。

ここで一つ覚えておいていただきたいのですが。現在の大坂城は昭和6年に竣工しました。北東の角、鬼門にあたる方向に、お社があります。大坂城は、殆ど事故もなく完成しました。当時、施工にあたったのが大林組です。大林組は、無事に大坂城が竣工したことを記念して、昭和九年にお社を建てます。ここに三つの石が立っています。真ん中の一つが白龍大神を祭っています。(写真1)

今の大坂城の現況はどういった聖地で囲まれているかを、前回廻ったことを踏まえてご紹介しておきます。大坂城の西側に坐摩神社の行宮があります。坐摩と書いて、「イカスリ」と読みます。ここが元々、坐摩神社の元宮にあたるところです。写真で見えるようにお社がこのような形で建っています。(写真2) 西から東に向いて、大坂城を望むようにお社が建っています。このお社の屋根の架かっている下に、鎮座石というイワクラがあります。神功皇后が腰掛けて休息をされた処として、信仰の対象として残っています。坐摩神社さんにこの聖石がイワクラの対象として祭られているのかとお問合せしたことがあります。しかし、基本的にこれは、神功皇后が三韓の征伐から帰還された折に、休息されるために腰を掛けられた聖石として、祭られているのだそうです。ただ残念なことに、昔の偉人が腰掛けられた聖跡の石として、一部の人が石を取って持ち帰る人がいるそうです。そのために、石を持って帰れなくするために、ステンレス製のガードで隔離された状態になっています。非常に可哀そうな状況になっています。(写真3)

「旧真田山陸軍墓地」

大坂城の廻りにはいろいろな聖所があります。北には桜宮神社。東の方には白山神社。南には、江戸時代、特に徳川家に崇敬された玉造稲荷神社。そして、さらに南にあります旧真田山陸軍墓地があります。ここが真田山という地名が付いておりますように、大坂夏の陣で、真田幸村が徳川方を防ぐための最前線の基地だったところで、真田丸のあったところだといわれています。実際は、もう少し西のこちらだという説もあります。真田丸のあるところに旧真

田山陸軍墓地ができるわけですが。この墓地の境内地には、同じ形をした石碑がのように並んでいます。五千柱程の同じ墓標が石柱として立っています。(写真4) このように石の呪術的なチカラが現代に作用しているのではないかと。前回の探訪会でも、いろいろとお話をさせていただきました。

「四天王寺の四石」

大坂城のお話を進める前に、もう少し南にあります四天王寺さんにあるイワクラのお話をします。四天王寺の伽藍の中心に金堂と五重塔があります。この真ん中に天法輪石という要石があります。西の極楽門のところ引導石があります。南大門のところには、熊野権現を礼拝するための石があります。東の大門のところには、伊勢神宮を遥拝するための石があります。(図5) この四石のお話の内容は、イワクラの会報8号に、会員の江頭務さんが「漢人のイワクラ」という論考で紹介されていますので、参考していただければとおもいます。

このように四天王寺の四石は、要石を取り囲むように、石が設置されていた。このような形態が、大坂城のところにあつた石山を中心としたイワクラが存在していたのではないかと考えるきっかけになるわけです。

それから、このSの部分になります京橋にある大阪ビジネスパーク。ここには高層ビルが十数棟立っています。これも一種の石柱として、空間の中に立っていると考えることができますとおもいます。

(図6)

□ 石の基層文化について

『作庭記』にみる石の呪術性

石の基層文化は、いろいろな日本の文化の中に隠されています。たとえば、日本最古の作庭書としてかかれた作庭記があります。平安時代の後期に書かれたものだといわれています。この作庭記は、非常に呪術的なシクミをかたちづくるように、言葉であらわした書物です。おこなってはいけない作法などが書かれています。その中で非常に有名な禁忌があります。丑寅の鬼門、東北の方向に、四尺から五尺の石を立ててはいけなさとあります。こういう石を立てた場合、主が病になつたり、または、人が住まなくなつて、鬼人が棲みついたりするということが、書かれています。

『謡曲にみる『殺生石』』

能から発生した謡曲に、「殺生石」という物語があります。鳥羽院が玉藻の前という絶世の美女を寵愛します。これが、狐の化け物で、天皇はそれを知らないで、非常に可愛がるわけです。しかし、これは日本の天皇を、抹殺するために送り込まれた化け物だといわれている。ある時、玉藻の前の正体がばれて、栃木県的那須の野に逃げ帰ります。そして、その怨念が石となり、この石から妖気が発せられることによつて、人、鳥などの動物が近づくと死んでいくようになる。このことから、殺生石と云うようになります。

この殺生石から続く話で、「細石」というお話があります。これは、人が信仰していた石を、もういらぬものだと思つて解体して道路にばら撒いて埋めてしまつたお話があります。そのために祟りが起きてしまつたが為に、バラバラになつてしまつた石を、もう一度固めて出来

た石を、細石と云います。

「イワクラの上に鎮座する観音像」

イワクラと聖地の関係を証明するものとして、東大寺の二月堂に観音さんを祭っています。この観音さんは、元々その場所にあったイワクラを、平面に削って、その上に観音さんが設置されています。

滋賀県大津市にある石山寺も、同じくイワクラの上に観音さんが鎮座されています。また、姫路の書写山にある圓教寺の観音さんも、イワクラの上に鎮座されていますように、沢山事例があります。

これが那須の殺生石です。この殺生石の廻りに千躰仏があります。非常になんらかの石の雰囲気を感じ出しています。このように、石の上に鎮座されているお地藏さんもあります。

左上の写真は、京都の下鴨神社にあります細石です。(写真5)

「石の呪術性」

ここで、今までお話してきたことを整理いたしますと、元々大坂城のあった下に石山という巨大なイワクラがあったと考えるわけです。秀吉が大坂城を築くために、このイワクラを破壊してしまつた。

城を築く過程において、石垣が細石のように、石が吸いよされて集まってきた。こういう呪術的な考え方が重要なのではないかと。

先ほど紹介しましたように、旧真田山陸軍墓地なども、五千柱ほどの石柱が乱立しています。これも、怨念の集積のようなものが集まってきたのではないかと考えています。

「身体性 理性 感性」

話の締めくくりとしまして、もう一つお話しなければならぬことがあります。人間の生活において、バランスを保つていくために、身体と理性と感性。この三つのバランスが大切だと昔から云われています。この考え方は、創唱宗教の始まりでありますゾロアスター教の根本的な一番重要な考え方です。日本でも大正5年に、日本マルクス学の創始者でもあり、京大法学部の創設者でもあります河上肇博士が、貧乏物語というコラムを当時の朝日新聞に掲載します。その朝日新聞の中で、最初に一番人間にとって必要なことを、彼は述べています。そのことが、身体と感性と理性のことだと述べています。感性のことは靈魂、理性のことは知能と述べています。

今の世の中は、感性の部分を排除して、理性的なものの考え方の中で世の中を統治、または調整しているこうしている考え方の中。目に見えないチカラとしての感性を、ずっと排除してきたのではないかと、私は考えています。その中にいろいろな歪が起こってきている。

例えば、この右下の写真に龍神さんが横たわっているように見えます。(写真6) これは、私が京都の日吉ダムで関わったアートプロジェクトです。日吉ダムの水面が、夏の渇水期になると下がります。そうすると、このように島の背が浮いてくる。この島の背を見たときに、龍神さんが横たわっているように観えたので、目玉だけを合成してこの写真に入れてやった。そして、龍神さんを見つけたことを記念して、ダムの提頂部でパフォーマンスをおこないました。感性として、間違つても、ここに龍がいるから目玉を入れようなど

とはおもってはいけない。要は、こういった龍がいるという考え方、感じ方。これが人間にとって非常に大切なことであること。これを、しっかりと理解することが、これからの時代、もう一度大切になってくるのではないかとおもっています。(註1)

なぜ、このようなお話をするかと申しますと、2006年に安倍内閣の下、教育基本法が改正されました。教育基本法の2条の中に、教育の目標が書かれています。この中に伝統文化を学ぶコトと、宗教の態度を学ぶということが書かれています。改正される前の教育基本法にも、宗教教育のことは述べられていました。どう宗教教育を学ばよいか、何一つ書かれていませんでしたので、これから教育の場は混乱します。特に宗教の世界では、目に見えないチカラをどう感じるか、認識するかという場であったからです。

今日のお話の中では沢山、言霊のお話が出てきました。特に日本語には、言霊としての目に見えにチカラを顕している言葉、考え方があります。渡辺会長からお話がありましたように、優れた建築というのは、何らかの優れたチカラを多々持っています。エジプトのピラミッドパワーを感じることもあるでしょう。そういうことが、これからの時代、非常に重要になってくる。そういう中で、四天王寺という伽藍の配置の中にも、目に見えない仕組みのために、イワクラが配置されている。こういうことを、新しいまちづくりを採用していかなければならないのではないかと。そこで、私は、和魂和才ということを提唱させていただいております。

以上です

註1

社叢学研究 第5号 NPO法人社叢学会
会員活動報告「天若湖における社叢化計画について」 橋本完

橋本 完 (はしもと かん)

- ・ 1962年、大阪生まれ。
- ・ 上田篤都市建築研究所を経て、生活空間の視点から新しい価値の創造を試みるために、そのヴィジョンとなるコンセプトをカタチづくるインキュベータ活動を志向。
- ・ まちづくりの新しい形態として都市空間に、「入らずの森」をつくる運動を行っている。
- ・ アトリエまほろ主宰

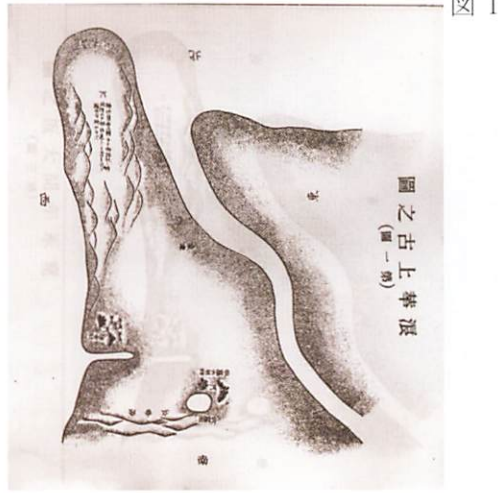


図 1

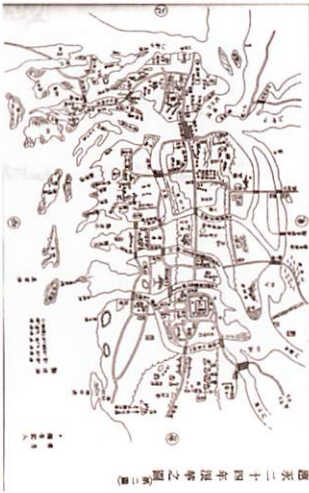


図 2

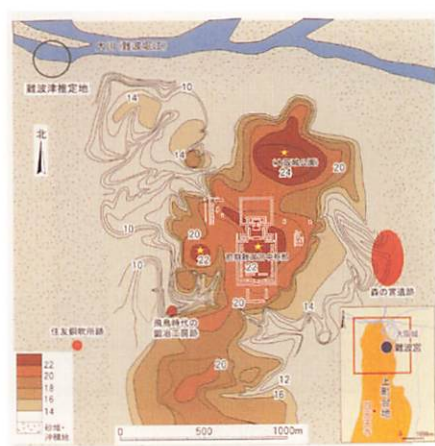


図 3

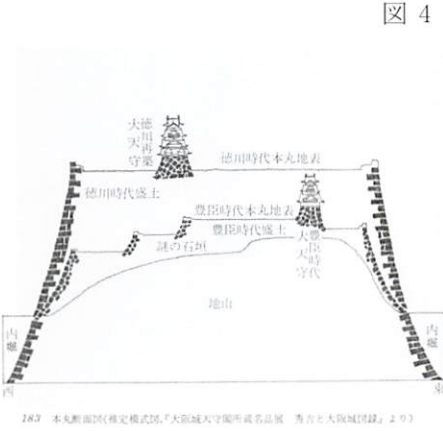


図 4

187 本丸断面図(推定横式図「大阪城天守閣所蔵名品展 秀吉と大阪城図録」より)



図 5

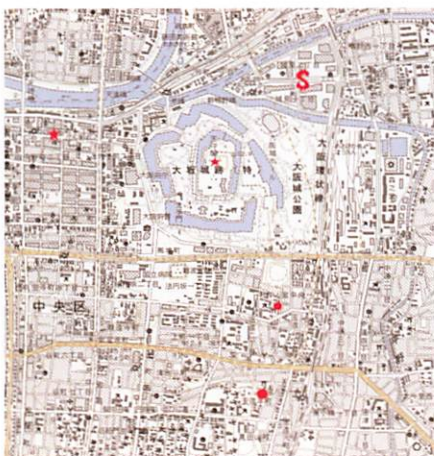


図 6



写真 2



写真 1



写真 4



写真 3

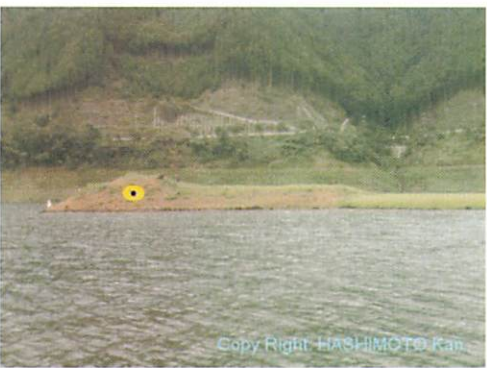


写真 6



写真 5

質疑応答 ……………

司会 それでは、ご質問のある方ございましたら、挙手を願います。

いたします。

〇〇 今日のお話しとは関係ないんです、アマノヒボコが追っ

かけてきて、奥さんを祀った神社、ひめこそ比賣許曾神社には、磐座があるのでしょうか。

橋本 比賣許曾神社には、見ている限りではありませんでした。

それから、今の場所は元宮ではないと一応言われておりますので、多分元宮にはあったのかもしれないと思います。

〇〇 元宮はどこかわからないわけですね。

橋本 まだ調べておりません。しかしあそこの鶴橋界限は、比

賣許曾さんを筆頭に、重要な神社が三つあります。ひとつ

はコリアンタウンになりますみゆきのもりが、御幸森 天神宮でここには磐座はありませんが、椋の木が五本ほどご神木として保

護されています。二つ目が、そのすぐ向かいにあります

やえい弥栄神社です。こちらは、江戸時代の初め一五〇〇年代に、

出雲の熊野神社よりスサノヲ命を、祀っている神社があります。ここは少し丘になっていまして、そういう石の上に築かれたのかもしれませんが。



神戸 灘の酒造りの唄

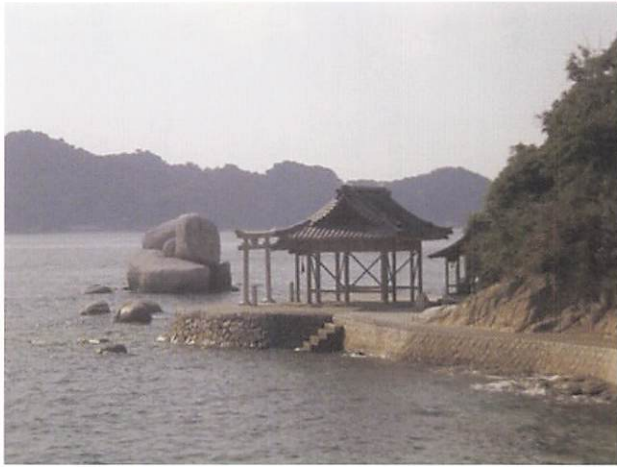
松山市「白石の鼻」における巨石遺構

篠澤邦彦

こんにちは。愛媛県松山市から参りました篠澤と申します。私はイワクラ学会には、つい最近の8月に入会させていただき、学会の事務局の方からイワクラサミットが神戸で行わ



図1



れるという話を伺いましたので、ダメもとで「研究成果を発表させて頂きたい」とお願いしたところ、何とか発表の機会をいただきました。私のような新人に発表のチャンスをいただいたイワクラ学会の皆様、NPO法人古代遺跡研究の方々に感謝いたします。本日はルキーらしく元気に発表したいと思います。

私が紹介させていただく巨石群は地元松山市高浜の観光港から車で5分程度の市街地近郊にあります。ここは「白石の鼻」という岬になっており岬の突端には小さな神社があります。それを「白石龍神社」といいます(写真1)。その神社の正面の海上40m程にこの巨石があります。地元の伝承では「龍が化けて石と為す」と伝えられておりまして、私はこの大きな巨石を仮称として「白龍石(はくりゅういし)」と呼んでおり地元の方にもそういうふうの説明しています。関西方面からフェリーで松山に來られ松山港に入港する時、注意深く見ていたらこの白龍石を見ることが出来ます。

それでは、この白龍石の古代遺跡の可能性として気づいた経緯・判明した内容を時系列に述べて行きたいと思えます。

それは、本年(2008)年1月に所要で車を走らせていたときにフトしたことで気が付きました。この白龍石は海岸の道路から常にこの大きな威容が見えるわけですが今までは地元の方と同じく「自然の力による不思議な造形」と見ていました。常に一般の住民に見えているわけですので私としては発見という大げさな表現よりも再発見、もしくは「気づいた」という表現や感覚の方が適切かと思っています。

それまで、何も不思議に感じなかった風景がその日は「うーん。何か違う?自然なものではないのでは?」と感じたわけです。そこから調査を始めました。1月の直ぐの土曜日に調査に行きました。龍神社の境内に佇んで海を眺めていたときにこの「白石の鼻」は白龍石だけでなく、沢山の巨石が海岸に横たわっているのですが手前にある3つの石の間に仮想的・人工的なラインが見えたんですね。そしてまた、左手を見ると、ある断面が非常に平滑な巨石があったんですね。当日は曇り空で太陽は出ていなかったのですが、それを

不思議に眺めていたときにお日様が徐々に顔を出して海面の太陽光線の反射とその断面が偶然重なりました。その時に「ああ。なるほど、こういう事だなあ（太陽運行と連動させている）」と感じました。

私は足摺のトオルマ洞門や岐阜の金山の巨石群が太陽の運行と連動しているという事例を以前から知っていましたのでこの「白石の鼻」も同じく、巨石と太陽や天体との関係に何かあるなど仮説を立てたわけです。

それで、天体と連動しているのであれば「まずは春分だろう」ということで観測を続けました。この白龍石は地元ではあまり知られていないのですが、実は中が空洞になっており対岸が見通せる構造になっておりまして、春分の日には太陽が、白龍石のその空洞を通過するということを確認できました。そして、夏至の日の日の入りのラインも他の巨石群と連動していることも確認できました。

また、私は、今年の夏に海の中を胸まで浸かりながら白龍石に渡ってみました。そこで、地元ではこの白龍石は3つの大きな石が積み重なっているのを見られているために「三ツ石（みついし）」と呼ばれているのですが、実は5つの大きな石で構成されているということがわかりました。そして、9月20日の土曜日に地元の方々20名程の参加を得て、白龍石に夕日が通過する天体現象の鑑賞および現地での説明会である「夕日の鑑賞会」を開きました。そして本日（9月27日）、イワクラサミットでの研究発表という経緯を辿っています。

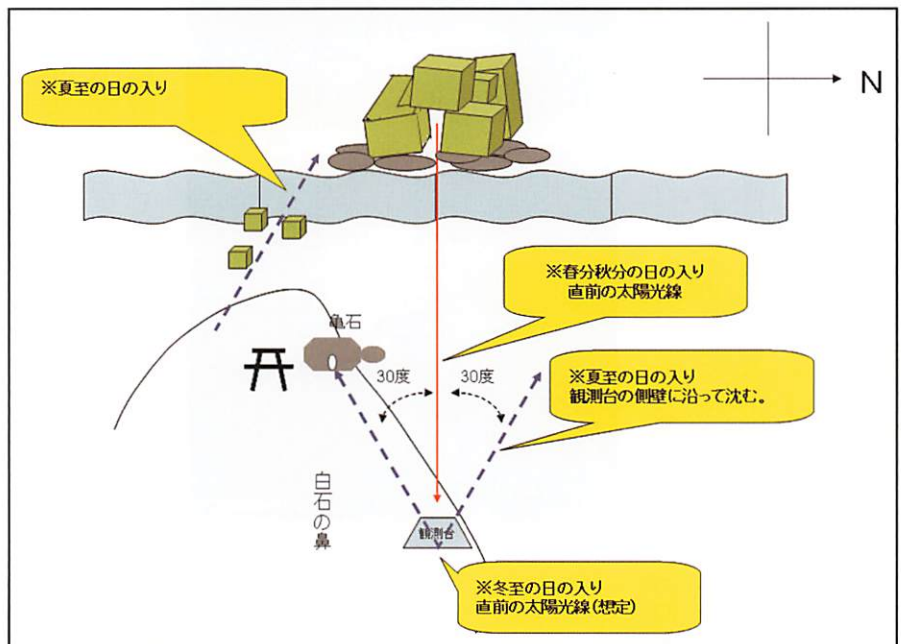


図1 「白石の鼻」概略図：2008年8月作成

図1が「白石の鼻」の全体の概略図です。神社の正面、海上40m程に5つの巨大な石が積み重なっています。花崗岩の比重から考えてそれらは一つ推定100トンを超えます。しかもそれらの下には2〜30個もある比較的小さな石、それでも推定1トン以上は雄に超える石が山のようにになって、5つの巨石を支えているという構

造をとっています。図の方角は真西が上、右が北、左が南を示します。春分・秋分の日には真西に夕日が沈みます。白龍石は真ん中が空洞になっており、その空洞を真西に望む海岸の位置に私が「観測台」と呼んでいる大きな石があります。この観測台という巨石はL字型に切れ込んでいます。海上からの風や波を寄せ付けず安全に観測できる構造になっています。

夏至の日は、真西から約30度北よりに夕日は沈みます。1月に最初に気づいた、白龍石の前の3つの大きな石で構成されている仮想的なラインに夕日が沈むことを確認しました。また、「観測台」の海上側の側壁、これも大きな壁となっているのですが、観測ポイントからこの壁に沿って夕日が沈むことも確認しています。

冬至の日はまだ来ていませんのでこれからが楽しみなのですが、観測台から見て真西に約30度南よりに私が「亀石」と呼んでいるこれも大きな石組みがあります。その大きな石組みも中央に空洞が開いてまして、ここが観測台から見て約30度にありますので冬至の夕日の太陽光線はこの空洞に差し込むと想定しています。現在は冬至の日を楽しみに待っているところです。

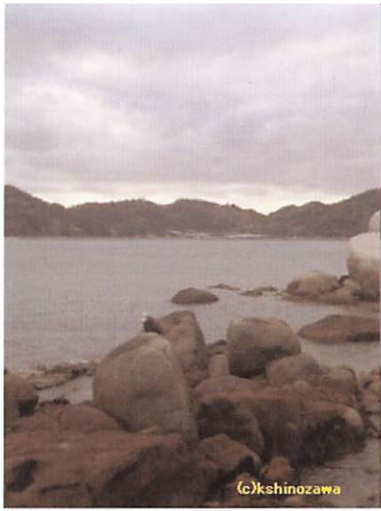


写真 2

写真2が1月に最初に気づきました仮想的なラインです。人がちよど写っていますのでその大きさがわかると思っています。白龍石よりは小さいですが人よりかなり大きいので1トンは雄に超えていると思います。そのうちの2つが横に對に向かい合って、一つが縦方向に並んでいます。それらの3つで仮想的に直線になっているのが見えたんですね。「これは人工的なラインだなと」。それで自宅に帰って地図で方位度を確かめると真西から約30度北よりでしたので、恐らく夏至の日はここに夕日が沈むだろうと推定し、今年の夏至にそれを確認することができました。

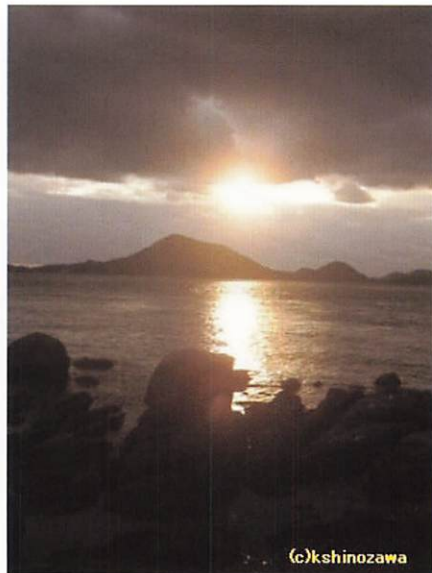


写真 3

写真3、これも1月の同じ日に、太陽光線と巨石群との関係に気づかされた現象です。これまでの経緯でもご説明させていただきましたが、神社の南側の海岸に凄く右側が平滑な断面になっている大きな石が気になっていたので、当日は曇りだったので、次第にお日様が顔を出して太陽光線の海面の反射とその石の断面がちよど重なりました。その時の写真です。

写真4は白龍石の空洞の写真です。白龍石が空洞になっていることは地元では実は知られていません。というのは神社側の境内で正面から白龍石を望むと空洞は全く見え、北側の海岸に降りて回り込まないとこの空洞が見える方向に行けないからです。かつ、現在は平均水面よりやや高くなる潮位だと観測台付近は海の中に没するからです。なので、釣りをする人以外は北側の海岸には回りこみません。干潮時に観測台から白龍石を望むと逆三角形上に空洞が開いており反対側の海上が見通せる構造になっています。

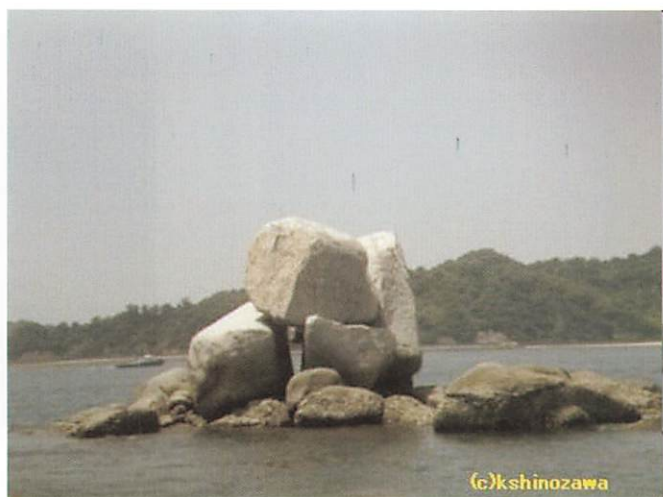


写真 4

写真 5

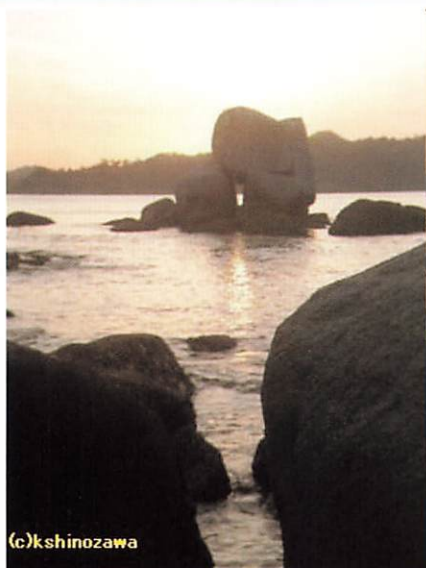
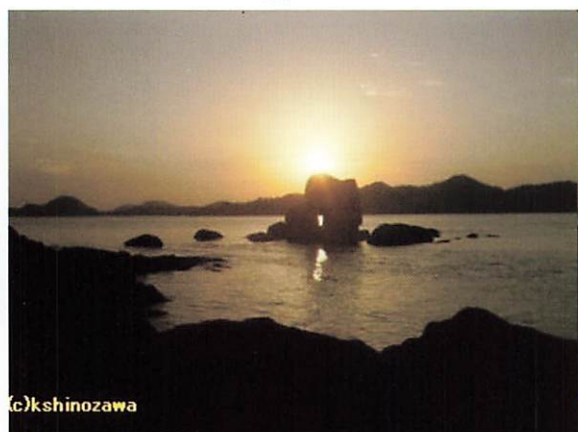


写真 6

写真5、6は春分の日から2日後の3月22日に撮った写真です。春分の日、3月20日も撮っているのですがその日は凄く海上が荒れてまして、判りにくいので2日後が風で風・波が収まり、こちらの方が判りやすいのでこちらで説明させていただきます。写真5がちょうど夕日が白龍石にさしかかった時です。既に白龍石の空洞を通過した太陽光線が海面を美しく照らしています。写真6は太陽が完全に白龍石の後ろに隠れたときです。その時は海面に反射する太陽光線が長い直線の帯になります。そして、海岸の手前にある2つの大きな石の間に海面の反射が映るような現象を起こします。私は白龍石が「龍が化けて石と為す」という伝承がありますので、この夕日が沈みきる直前の天体現象を「龍が昇る道」という風に呼んでいます。

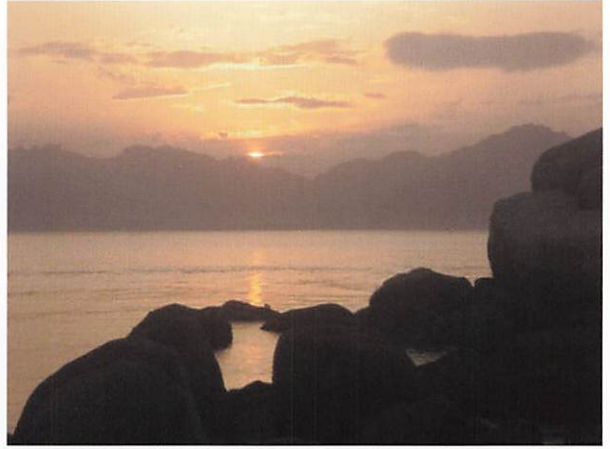


写真 7

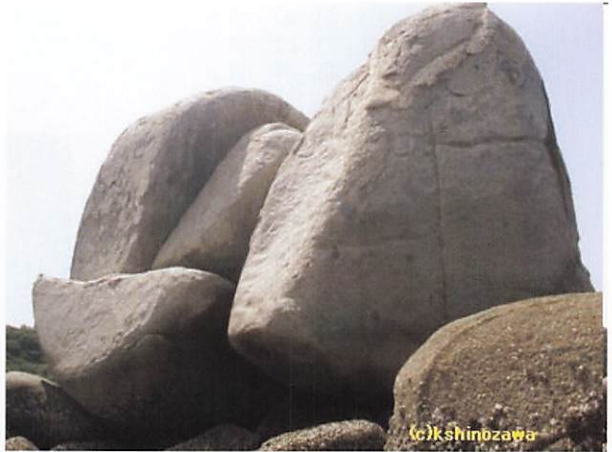


写真 8

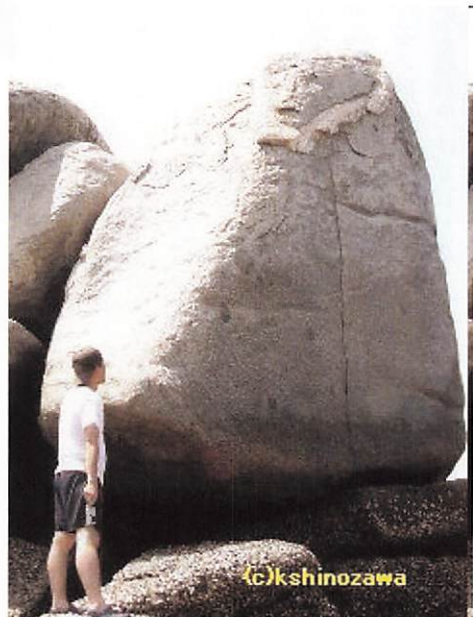


写真 9

写真7は夏至の夕日のラインです。1月に気づいた3つの石で構成された仮想的な直線のラインに綺麗に沈んでいます。

写真8、9は今年の夏に白龍石に渡ったときに撮った写真です。海岸からは見えない方向から撮影しています。写真8では4つの大きな石しか写っていませんが裏側にもう一つありますので合計で5つの大きな巨石があります。一番大きな石は高さが推定約6mはあり、重さは約140トン以上と推定しています。その石の上部の角には何か違う種類の石質でマークを施しているように見えます。

写真10、11は白龍石を支えている構造です。写真10は一番大きな石の下部ですが比較的平べったい石を台座のように2枚重ねてその上にしつかりと乗っています。写真11は土台の基礎となっている石と上の巨石を咬み合わせているような構造になっています。



写真 11

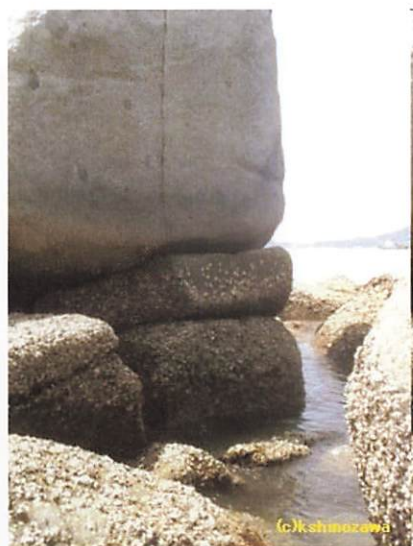


写真 10

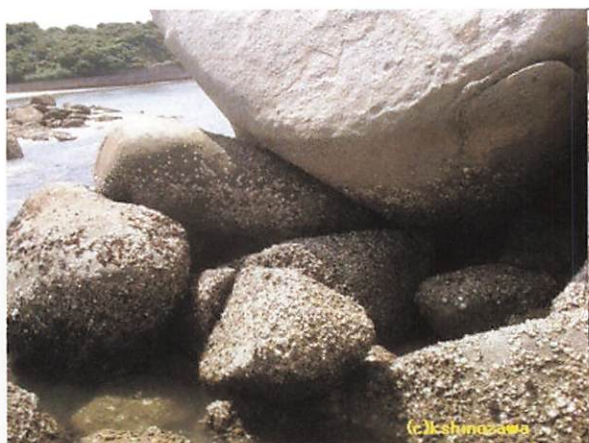


写真 12

また、写真12、13は楔の石を打ち込んで強固に支えています。白龍石は大きな地震や台風でも崩れなかったと伝えられており下部構造はこう言った形で強固な構造になっています。



写真 13



写真 14

写真14は三角形の形に切り出された石です。これは平均海面より下にありまので普段は海面下に没しています。そのためフジツボ等が沢山ついています。白龍石の周りの海中にはこのような人工的な加工を思わせる大きな石がごろごろと転がっています。



写真 15

写真15はグーグルマップの航空写真です。白龍石は巨大でかつ海上にありますので航空写真でもはっきりと確認することができます。観測台の巨石も識別できます。写真は北が上になりますので真西は左です。観測台からちようど左側、すなわち真西に見た位置に白龍石があることが判ると思います。また、少し見づらいですが夏至の境内から約30度北より引いたラインが夏至の日の夕日のラインです。



写真 16

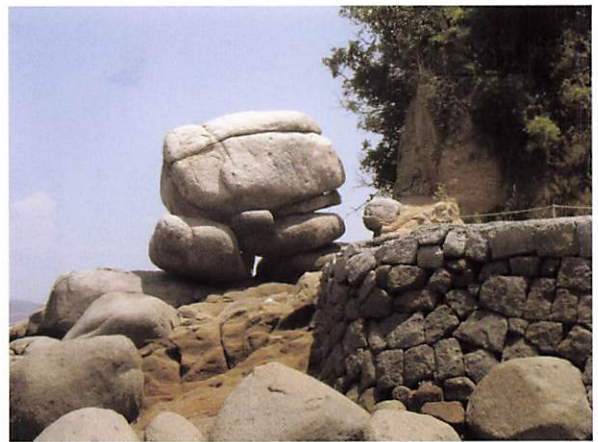


写真 17



写真 18

写真16は私が亀石と呼んでいる大きな石組みです。これは、家内と白石の鼻を訪れたときに家内が「あの石、亀に見えるね」と言ったので、よく見ると確かに亀のような形に見えるんですね。頭があり、胴体があり手が出ているわけですが、これも楔の石を間に咬ませながら絶妙のバランスを保っています。凄く不安定そうに見えるんですが、数年前の芸予地震などでも近くの寺等では被害もありませんでしたが全然、崩れなかったと言われています。しかも、写真17を見ていただければ判りますが海岸に降りてみるとその絶妙なバランスが一層、際立ちます。また、実はこの石組みにも真ん中に空洞が開いています。それで、観測台から見ると真西より約30度南の方向に見えますので恐らく、冬至の夕日はここに差し込むと想定しています。

写真18が「観測台」と呼んでいる巨石群です。観測台は海上側に対してL字形に切れ込んでいまして海が荒れている日でも風や波を防ぐことができ、安全に観測をすることができます。

写真19は9月20日、行いました「夕日の鑑賞会」で観測台付近で日の入りを待っている様子です。

写真20は夕日が丁度、白龍石の上部に差し掛かり地元の方々を観察している様子です。写真21は夕日が完全に白龍石の背後に隠れ、太陽光線の海面反射の帯が長く海岸付近まで差し込んでいく様子で春分の日と同じように、私が「龍が昇る道」と呼んでいる美しい現象を秋分の日前後も見ることができます。



写真 20

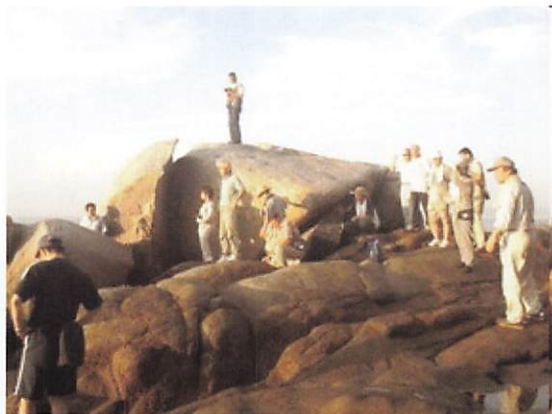


写真 19

以上、ご説明させていただきましたように松山市の「白石の鼻」にある巨石群と太陽運行は非常に連動しています。ここは古代の祭祀施設かつ天体観測施設だと考えています。太陽運行については現在、冬至の日を待っているわけですが、背後の経ヶ森と呼ばれる小高い山頂には磐座らしき巨石群も存在し、前方の興居島には岩上神社や神功皇后伝説が残る大將軍神社など巨石の遺構などもあります。

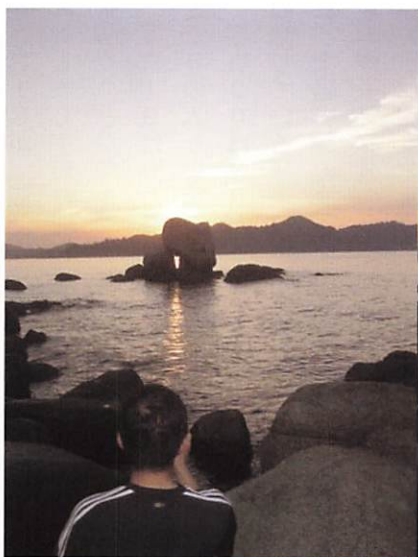


写真 21

これらの調査も今後、継続して実施していきたいと考えています。調査の内容等につきましてはインターネット上のブログ「白石の鼻 研究レポート」(<http://haku114.blog44.fc2.com>)に掲載いたしますので併せてご覧いただければ幸いです。本日は、このような発表の機会をいただきまして誠に有難う御座いました。

篠澤 邦彦 (しのざわ くにひこ)

- ・愛媛県出身。
- ・郷土史研究家（主に先史時代の巨石文化について探求）
- ・歴史研究会会員、イワクラ学会会員、松山・白石の鼻巨石群調査委員会事務局兼主任研究員
- ・現在、「白石の鼻」巨石文化の可能性について調査研究・情報発信・普及に努めている。

質疑応答 ……………

司会 それでは、ご質問のある方ございましたら、挙手をお願いいたします。

〇〇 今、きれいな夕日ですが、どうしてその夕日のところの石の方に神社ができなかったのでしょうか。

篠澤 神社自体は、台風で何回か崩れています。今建っている場所もかなり良い場所だと思のですが、もとは元宮という所にあつて、そこから移したと、その神社の由緒書に書かれています。今の神社の場所は、この間の秋分の日に確認したのですが、秋分の日夕日のラインと、神社の鳥居とその本宮とである社側とは、ほぼ直線に入るような形になっているように思います。

〇〇 今の観測石の裏側が山の上ですので、あの山を上の方を探ってみました、何か元宮があるかもわかりませんか。

篠澤 そうですね。この山に経ヶ森きょうがもりという山があるのですが、この経ヶ森の中腹に大寶寺たいほうじという四国八十八ヶ所で有名なお寺があ

ります。そこは本堂が国宝ですが、そこを建てたマヤチヨウジャが大阪に来るときに嵐にあつて、高浜沖を航行していたときに、経ヶ森から五色の光を見た。その光に向かつて船を進めて行つたら、波が静まって無事丘に上陸できた。それのお礼のために大寶寺を建てたという伝承がありますので、その経ヶ森の頂上には何かあるのかなと思います。

〇〇 奈良県山添村の榊型岩もまさに真西の夕日が入ることになつておりまして、海岸の向こうの山が重要だと思ひますが、私のところは、真西は、ニュージンジャがあります。そしてその先に行きますと、奈良の都の聖武天皇の御陵、どちらが先かは分かりませんが、それを目指して設置されております。

篠澤 真西の方向にゴゴシマという小さな島があつて、巨石じんぐうが何個かあります。石神社とか神功皇后が立ち寄られた神社もあるので、今後そちらも調査しようかと思つております。

司会 それでは質疑を終わらせていただきます。

先ほど中島の方からお話がありました、足摺岬で磐座サミットを主催された富田さんがご出席されておりますので、お話をし

いただきたいと思います。

富田 足摺から来ました富田です。私は磐座サミットには縁がありません。一番初めに奈良県の山添村で行われた時に、呼びかけがありました。行く前に、二回目については、うちでやろうと決めて、市長にもその話をして、お金がいくらかかるかわからないがやろうということで行ってまいりました。それがきっかけで、二回、三回目というように現在に至ったわけですが、磐座学会の設立についても、当初から関わりを持たせていただきました。そのようなつながりから、また足摺の方も見直していただけたらと、パンフレットを持参いたしました。驚いたことに、中島先生から、足摺での第二回の磐座サミットでの出会いのお話がありました。また足摺岬のおおどのトオルマの夕日の問題も語っていただきましたので、本当にご縁があるのだと、しかも問題を提起できたことは、本当にあり難いと思っております。

足摺岬につきましては、このように巨石が数多くありまして、今まで、テレビでも取り上げていただいたこともあります。四年ほど前ですか、TBSのBSの放送で正月の一日、二日、午後七時から九時、四時間放送していただきました。放送は、スندگانランドの問題が主でしたが、海底遺跡ということがありますが、一時マスコ

ミにも取り上げてもらい、周辺の人達からも期待を受けました。ただ、調査の段階で出ましたのは、先ほど渡辺先生にお話ししたように、やはり従来の研究者、学者からの圧力や軋轢も持っております。そのような第一線の方々が交代したら、無くなるのかというくらいに思っている次第です。

昨年は、磐座学会で学会の方を対象として、足摺でのツアーを計画させていただきました。しかし、残念ながら、一番最初めに計画した七月に台風が来まして、直前になって中止せざるを得なくなりました。その後九月に行つたのですが、残念ながら参加者は少数でした。是非皆様も足摺の方にも足を伸ばしていただいて、ご連絡いただければ、私たちが一生懸命案内をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

今日は、トオルマの夕日の実行委員会を立ち上げました責任者である谷が来ておりますので、谷の方から夕日について、お話をさせていただきます。いただきたいと思えます。

谷 足摺から参りました谷と申します。今日はPRと発信ということで、初めて参加させていただきました。多分日本には、こしかないのではないかと思っておりましたが、篠澤先生から、松山にもあるということで、私も勉強になりました。今後この問題につ

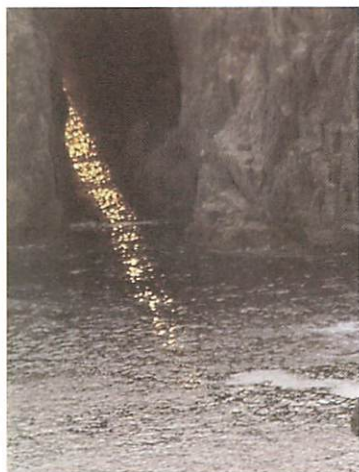
いて、皆様にもっともつと教えていただきたいと思ひます。

足摺半島のおおどという場所に長さ約八十メートルの洞窟がございます。ここに春分の日と秋分の日を挟んで前四日と後四日のお天気のいい日にご覧になれる大変珍しい光景があるとご紹介させていただきます。自然が造った海蝕洞門の光の光景ということで紹介をしてみました。私も自身も引つかかるものがありました。万が一自然が造ったものとして、洞門に光が入ることがあるにしても、しかもそれが、春分、秋分の日に限るといのが何か不思議に感じ、富田さんが研究されている足摺縄文巨石研究会との関係の方が、お客様には説明がしやすいのではないかとということになりました。現在、多い日で三百人ぐらいの方が訪れ、カメラマンの方々が興味を持たれている場所もございます。

この秋分の日は残念ながら駄目でしたが、前日の二十二日にすばらしい光景を見ることができました。春にはこういう光景がご覧になれると思ひます。場所的には、足摺半島の西回りのジョン万・黒潮ロードと呼ばれている足摺岬から清水に向かった二キロぐらいの所で、おおどトンボ公園がありますので、今年も二十二、二十三日にイベントを行います。桃太郎旗を立ててすぐにかるような場所になっています。この三角の山は、左側が白礫で、日本唯一の黒潮接岸地であります。この関係もあるのではないかと

考えております。夕日は、この白礫の頂上に指して沈むので、昼と夜が一緒です。夕方は、夕方の六時が日の入りで、五時四十分ぐらいの時間帯からこの光景が始まりますので、六時では間に合わないのです。お見えになる時には少し早めにおいでいただきたいと思ひます。なお、この洞門と後ろ側にあります天狗岩との関係もこれから研究していかねばならないと思ひます。簡単ですがご説明申し上げます。

トオルマの夕日 撮影：谷孝二郎



イワクラ学の確立をめざして

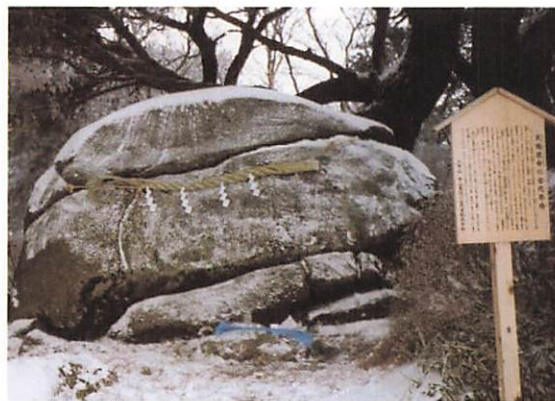
NPO 古代遺跡研究所 所長 中島 和子

私たちの研究所「NPO 古代遺跡研究所」は今年で創立十年を迎えます。この十年の間に、幾つかの大きな研究テーマを抱えて参りましたが、その第一は「磐座をどう観るのが正しいのか」で、第二には「その磐座にどう向き会うのが正しいか」でありました。

第一の「磐座をどうみるか」につきましては、人それぞれというほど沢山の観方があります。或る小説家は「UFOの発着地」だと言ひ、その場を観たという人も現れ、観光の謳い文句になった所もあります。また「遠い星との交信の場」と言う人もあり、「癒しの場」と言う人もあります。

また、「磐^{いわ}」は巨石を意味するところから、全国の巨大な岩や奇怪な形の岩を磐座と観て写真を集めている人も少なからずおります。現代社会は個人の自由が尊とばれ、どのような意見でも発表する自由が保障されていますから、百人百色の磐座観が披瀝されたとしても驚くには値いたしません。しかし、研究所と名がつく限りそこには真理探究の姿勢が不可欠となります。沢山あるなかのどの観方が真理なのか。いかなる方法によれば、磐座を正しく捉えることができるのか。その方法論とは何か。

私たちの出した結論は次のようなものでした。「磐座を構築した縄文創草期以前の人々の世界観、宇宙観、またその時代の時代思想などを勉強することによって回答を得よう」ということで、取り敢えず古典、なかでも古事記を勉強することにしました。



山六甲(神戸)の磐座(いわくら)の命(みこと)の日の穂(ひのほ)の天(あめ)

しかし、直ぐに直面した問題は「古事記をどう読むか」でした。この点につきましては、後ほど再び取り上げるとしまして、ここでは磐座について一般に疑問に思われている点を挙げ、それについて私などのように考えているかを発表し、皆さまの討議にかけたいと思います。

まず第一は、磐座と自然の岩とはどう違うかということです。私は、どんなに大きく、また立派であつても人の手の加わっていない自然のままの岩は、磐座ではないと考えます。磐座の磐は巨石、そして座は、神の降臨される場という意味ですから、その磐は斎場として形造られています。原型の美を尊び生かすというのが日本文化の特徴です。磐を細分して積み挙げるといふような原型をつぶす手

法は使われていません。一見自然石そのもののように見えます。しかし東西南北からよく観察すると、多くの場合、磐座の地底には礎石そせきが敷かれていて、礎石の上に磐座はしっかりと据えつけられています。明日のツアアの第二の訪問地「天之穂日命」の磐座をあめのほひのみことご覧下さい。逆半円形の優雅な美しい磐座は、大きく立派な礎石の上に立っています。礎石の有無は地面や磐座の状況によって決められるのでしよう。たとえ礎石がなくても、磐座の姿を東西南北からよく観察すると、その抽象美は、現代のいかなる偉大な芸術家もおよばぬ、美しく神秘的な曲線美から成る造形で、それは人為的であり、決して自然のままの磐の形ではないことがわかります。

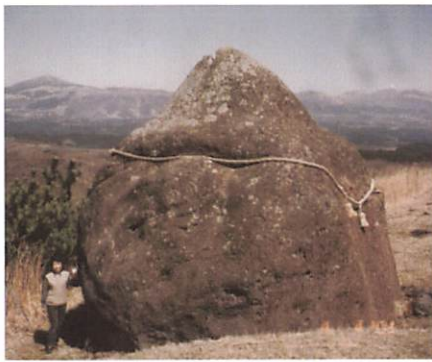
沖縄には、日本の昔の文化が言葉をはじめとして多方面に残って



笠石磐座 (宮崎 矢岳高原)

います。至る所に、「うだき」と呼ぶ拝む場所があります。その奥を探ると三角の石が見つかることがあります。石に限りません。沖縄本島の北の伊平屋島いへやでは「うだき」だといって、素晴らしく大きく立派な松の巨木や、島の中央に位置する清く大きな沼、また山の上にはすばら

しい海の景色が眼下に見渡せる所に、線香の様な焚くものが置いてあって、誰でも景色が拝めるようになっていきます。ここでは、岩のみならず木でも沼でも景色でも、人間の能力を超えて偉大なものが拝む対象となっています。これはあらゆる物質、たとえば火や水にいたる物質にも魂があると考えた古代人に普遍のアニミズムですが、超人的なものに畏敬の念を抱き、これに祈りを捧げたいという衝動に駆られるのは、現代人にも見られる人間に特有な本能で、いかに賢くても犬や猿が祈りを捧げる姿を見ることはできません。

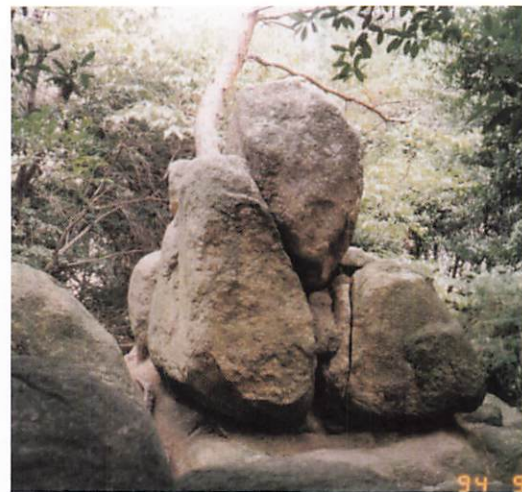


押戸石磐座 (熊本)

「神の山」と呼ばれる山が、日本には沢山あります。あの山は「ご神体」という言葉もよく聞きます。どんなに美しい山でも果して山が神様のご身体ということがあるでしょうか。或る山がご神体とよばれる場合には、その山に尊い磐座があり、その磐座に尊い神が降臨されるから、その山も磐も尊いのです。また、私たちが磐座の前で祝詞をあげたり、雄たけびを挙げたりすると、岩を拝んだり岩の前で奇声をあげたりするのは、野蛮で未開で宗教だという人達がいまいます。岩を拝んでいるわけでは

なく、その岩に降りられる神に祈りを捧げているのであって、岩にとつて人間に拜まれることは甚だ迷惑千万なことなのです。

磐座の形態



越木岩神社 奥津磐座（西宮）

では、いかなる神が磐座に降臨されるのでしょうか。どの神でも良いわけではありません。一般には太陽神と言われていますが、正式には「天照皇大御神」あまてらすめのおおみかみをはじめ天地創造の神々であり、また人間を含めた地球上のすべての生物の誕生と育成・進化を司る神々です。磐座を構築した時代は、未だ国家や宗教の発生なく、私有財産の観念のない時代です。人々は血縁に基づく氏族制度のもと、太陽を崇拜し自然を崇拜して、生きとし生けるすべてのものの上に自然の恵みが豊かならんことを祈願した時代です。その文化は現代のように縦割りの寄せ集めではなく総合的であり、太陽はその総合のシンボルであったのです。

祭場の中心をなす磐座には、外国でメンヒル (menhir) と呼ばれる一つの巨石から成る場合と複数の岩が組み合わせられて単一の磐座が形成されている場合があります。稀にほぼ同形同サイズの二つの磐座が東西または南北に対峙する場合がありますが、この場合はかなりの広域における太陽崇拜の中心であるようです。私の知る限りでは、九州のほぼ中央に位置する熊本県と宮崎県の県境に位置する国見岳の頂上、近畿または阪神地区の中央に位置する六甲山頂の三国岩、四国足摺岬の白皇山それに南米大陸のほぼ中央に位置するマチュピチュの老峰と若峰の二岩峰 (P6) が挙げられます。六甲山上の三国岩の東磐座は、残念ながら全面破壊されて西磐座と岩門しか残っていませんが、春分の朝日は真っ直ぐ西磐座に影を落とす位置にあり、かつてはこの二つの磐座が東西に対峙していたことを告げています。

九州のほぼ中央をなす国見岳山上の相對峙する二つの磐座について、中央大学の名誉教授であり、神社本庁の教育顧問をされていた中西旭教授は次のように説明されています。あきと

「国見岳の東磐座は、天照大御神の荒御霊が、西磐座には和御霊が祀られている。またこの二つの磐座は、同形同質で、ほぼ同サイズであるが、その置かれている状況が異なる。即ち東磐座は少し高所にぎみたま

にあつて、下界を眼下に全眺されるとともに、すべての風雪をその
 身で受け止める態勢にあります。西磐座は少し低所にあつて、山上
 のすべてを引き込みます。または抱え込む態勢をしていて、後方は
 灌木に覆われて展望はきかない。どちらも尊い神座であるが、主た
 る神座は和御霊を祀つた西磐座で、その前に社殿の跡が発掘されて
 いる」

しかもこの原理は、今日の伊勢神宮の建築様式に強く引き継がれて
 いる点は特に注目に値します。すなわち、天照皇大御神を祀つたそ
 の内宮にも、豊受大神を祀つた外宮にも、ほぼ同形の社殿が二社ず

つ配置されています。内宮の天照大御神の和御霊を祀つた正殿と
 荒御霊を祀つた荒祭宮、また外宮においても全く同様に、豊受

大神の和御霊を祀つた正殿と荒御霊を祀つた多賀宮が対応します。
 南米ペルーのマチュピチュの二つの岩峰も、磐と岩峰、社殿の相違
 こそあれ共通の原理に基づいて太陽崇拜の古代斎場が構築されてい
 るのを見るのです。マチュピチュの真西の海岸には、ナスカの地上
 絵があります。地上絵を描いた古代人は巨人だったとも言われてい
 ます。巨人かどうかはともかく、遠大な知恵と力を持った古代人で
 あつたとすると、東方の山上に、磐を積み岩山または岩峰を築くこ
 とぐらい出来たとしても決して不思議ではありません。



ペルー マチュピチュ

↑ 若峰マチュピチュ
 ↓ 老峰マチュピチュ



熊本 国見岳

↑ 西磐座
 ↓ 東磐座

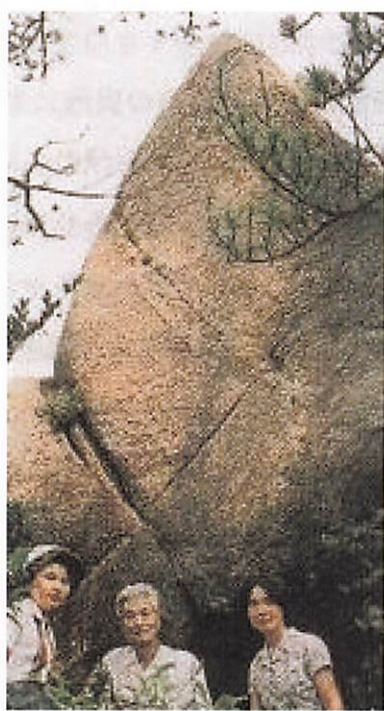


磐座と磐境・磐座の規模

大方の磐座は、長い年月の間に破壊が進み、元の原型は殆ど失われていると考えなくてはなりません。手つかずだと思われた六甲山の三国岩の磐座は、先に噴火した西六甲山の最高峰に構築されています。その後、東六甲山が現出して山上の開発の中心となったため、三国岩周辺は長く営林署の管轄下にあつて手つかずであつたのですが、大正時代に払い下げになり、三国岩周辺は、川西倉庫会社が買い取り、住宅を建てた昭和三年には、なお大きな岩が累々と残存していたということです。その後荒深先生が踏査されたときにも、まだその一部は残っていて往年の姿を忍ぶことが可能だったようですが、後継者である日立道根彦先生が訪れたときには大きく様替わり、今ではただ磐門と西磐座を含めた数個の岩が散在しているだけの荒地となつています。

しかし、磐座は決して単独で構築されるものではありません。そこへ降臨される神のご性格やご神徳や歴史等を示す多種多様な添え石や添え岩組みが、垣根のように幾重にも取り巻き、全体としては幾つかの山をこえる大きな規模を持つ斎場なのです。この添え石的存在を岩境と呼びます。良く知られている岩境に、環状列石（ストーンサークル）や机石（ドルメン dolmen）また半円形の列石（クロムレク cromlech）や二個の立石の上に、横長の石を載せたトリ

リトン (Trilition)、また日本に独自といわれる岩境として、三種の神器すなわち、鏡、劍、玉をかたどつたものがあります。明日のツアード皆様は三国岩に添えられた「草薙劍岩」と「八咫の鏡岩」を参拝することになっていきます。これらの岩境は、高さ一〇メートルに達しています。三国岩の磐門は瀬戸内海の波に洗われた清らかな巨石を四層に積み上げた見事な門構えで、岩は上へゆくほど大きさを増し、頂上の岩には天文図が彫られています。これも高さ一〇メートルに及びます。



磐境 草薙劍 (芦屋 六甲山麓)

ここに降臨される神は、あまてらすすめおおみかみ天照皇大御神の第一のお供神であるたちからを手力男の命みことと有馬日岳の命ありまひだけです。また六甲山の山麓みこと（芦屋市）にある「草薙劍岩」は、磐門を持つ広大なる斎場の奥に高く聳える菱形の巨石で高さ一〇メートルあり、その南面にはオリオン座

の三ツ星が彫られていて、この磐境に降臨される神は雷神（武御雷の神）であることを示しています。西洋の星占いによると、オリオンは天下に無敵の勇者ですが、蠍さそりに刺されて死にます。ですから、夜明けの空に蠍座が昇ってくると、姿を消すことになっています。



磐境いわさか 八咫の鏡（芦屋 六甲山麓）

しかし、日本の古代思想体系のなかでは、雷神は風神（経津主の神）と一対をなしてふつぬしいて悪魔や邪神や穢れをうち払う強烈な祓いの神なのです。古事記のなかに天若彦あめわかひこの命の話があります。地上を治めよとの天命を受けた天若彦の命は、側女に変身したさくめ邪女に心を奪われて天命を忘れ去ったのみならず、天神のお使いの鳥を側女に唆されて撃ち殺してしまいます。怒られた天神は祓いの二神に命じて、この邪女を太平洋の彼方へ追い払ってしまわれるのです。雷神の強烈な稲光と轟音に叩かれ、風神のたけ狂う暴風に吹き飛ばされて太平洋の彼方へと。剣岩の近くには風神の岩が配置されています。



磐境いわさか まっこう鯨（宮崎 矢岳高原）



磐境いわさか 鯛の岩（宮崎 矢岳高

次いで「八咫の鏡岩」は、剣岩の南方のさらに人里近くの六甲山麓に、昔は剣岩に劣らぬ立派な岩境群に囲まれていたと推察されますが、この地に国際ホテルを建てようと、後には芦屋大学を建てようとした人たちによって破壊され、今私たちの目にすることのできるのは、中心をなしていた鏡岩とその近くに配置された「潮干満玉の岩」のみとなっています。鏡岩は、淵のフリルも原型を残す幅四メートルをなす美しくも厳かな大鏡で、その表面には歳差円の三ツ星が示されています。ここに降臨される神は「八意思兼の大神」やしろおもいかねです。他方、玉岩は現在地中にあり、そのお姿を見ることはできませんが、いつの日か地上に立たれることでしょう。これらの岩境は特に尊く、磐座としても仰ぎ見られています。

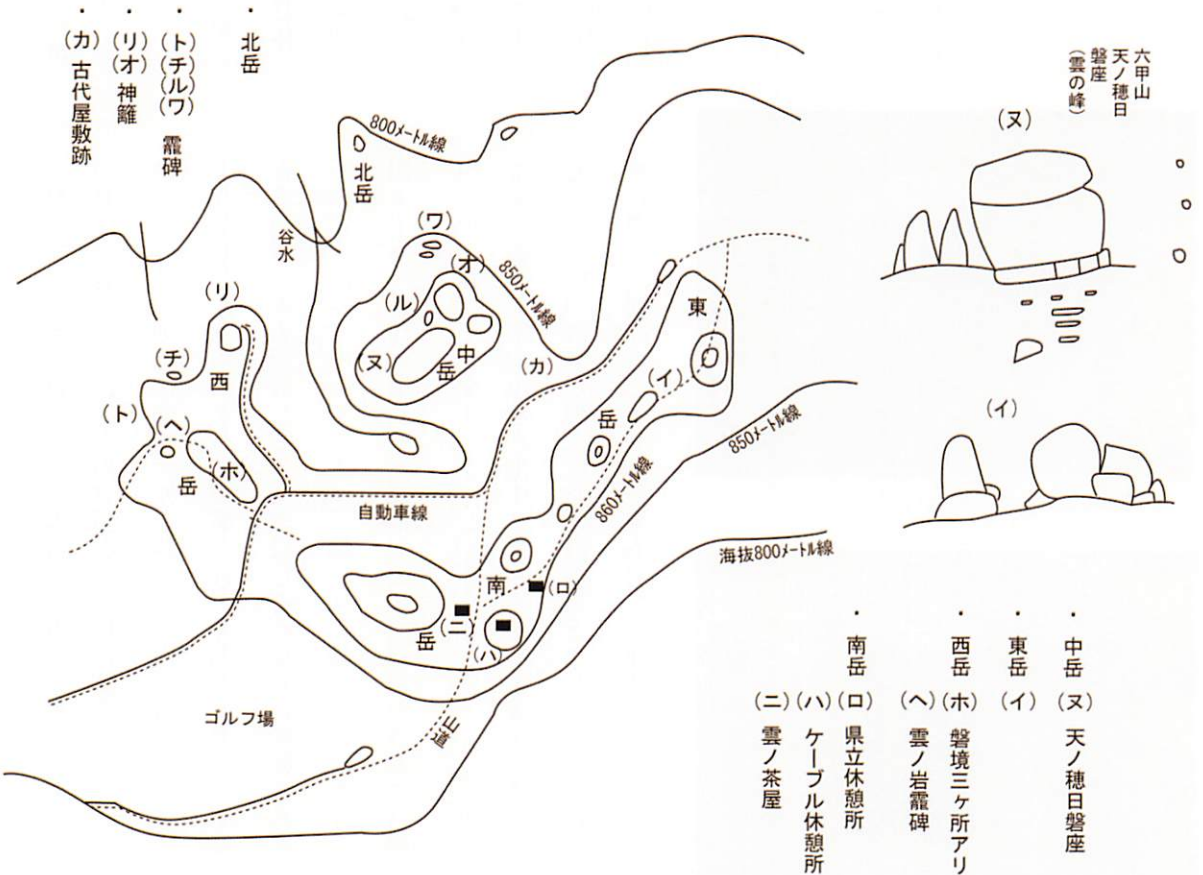
この他に、日本の磐座に添えられた岩境としてよく見受けられるのは、蛙や亀があります。また熊本県えびの市の郊外の矢岳高原にはマッコウ鯨や鯛が岩境として添えられています。したがって磐座の規模は、岩境を含んで幾つかの山を越える大きさです。三国岩に例をとりますと、表表□をご覧ください。その規模を示す黄色の直角三角形は、この磐座の東部のみを示すものですが、神戸市に始まり芦屋市、西宮市、宝塚市の四市にまたがり、武庫川の上流の「みかえりの岩」までを含んでいます。



いわと 岩門 越木岩神社 (西宮)



いわと 岩門 三国岩 (神戸 六甲山)



あめ ぼひ みこと 天の穂日の命の磐座の範囲図 (神戸 六甲)

磐座と神社・磐座の歴史的変遷

ところで、その後、磐座はどうなったのでしょうか。現在私たちは磐座のことを殆ど知らされていません。

ある芸術大学の助教授で考古学の専門である知人を六甲山の磐座へ案内した時のことです。彼は磐座を見て、

「こんなものが日本にあつたのか！」と心底驚き、暫く姿を消していましたが、やがて姿を現してこう言いました。

「良く分かった。しかし、僕がこれを自分の専門にすると、僕の将来は無い！」

その通りです。今の日本の学术界も政治はもちろん、教育や文化の分野でも多くの指導者は、磐座をはじめ、日本文化の源泉に触れようとしません。自国の古代文化について深い偏見を持っており、真実を知ろうとせず、責任の有る大人たちが誤解されるのを恐れているのです。日本の有能な学者のなかには、祖国を遠く離れた外国の古代祭場の発掘調査に没頭して多大の貢献をしています。自国の文化に誇りを持ってないことほど残念なことはありません。

ところで、日本で磐座が建てられたところ、世界の今に残る古代神殿建築も岩で作られていました。岩は、当時最も永久的な建材だったのです。そしてその多くが、今もその岩の姿を留めています。ところが、日本の磐座齋場は劇的変化をとげます。最近の調査により

ますと、今から約八千年ほど前に、南からの暖流「黒潮」の流れが二つに分岐し、日本列島を包むこととなったため、気候が温暖となり日本列島は森林化した結果、木の文化が生まれその結果木造の神殿、すなわち現在見られる神社建築が生まれたのです。磐座に比べはるかに簡略となった神社建築は、まず磐座の前に供え物を置く幣殿を置くことから始まったのではないのでしょうか。「便利」ということが価値の上位を占めるようになり、やがて人々は山の麓に木造の下宮を建て山上の磐座から遠退きます。さらに年月を経過して、人々の便利主義はさらに高まり、自分たちの住む里の近くに神社(里宮)を建て、山上の磐座は次第に忘れられてゆきます。現在神社本庁に登録された神社の数は八万社とも十万社ともいわれていますが、この大半はこの里宮です。つまり磐座は、これら神社の前身であり元宮もとみやなのです。

磐座おのみかのこの歴史的変遷過程を今に残している神社があります。奈良の大神神社は大きく立派な神社ですがその境内にはご祭神を祀る本殿がありません。参拝者が入って拝む拝殿があるのみです。本殿は裏の山(三輪山)ということになっています。尊い磐座のある裏山を本殿としているのです。西宮市の越木岩神社にも古代の磐座齋場が新しい木造の社の背後に残存しています。

京都の有名な上加茂神社を調査していた外人研究者が、あるとき

私に秘密情報を教えてくれました。それは、毎年行われる神社のお祭りは勅使が遣わされて始まるのですが、その前後に裏山の磐座へ神々をお迎えにゆく行事があることが分かったというのです。確かに、本殿から少し離れた西側に「お神山」と言う立て札が立っており、その背後をはるかに見渡すと山があります。戦後神社とお神山との間にゴルフ場ができたので以後は山へゆかず、ゴルフ場内に建てられた祠(お旅所)へお迎えにゆくことになったとのことです。

お神山は禁足になっており、この神社の神官は誰も登った者がないとのことです。しかし、お迎えに行かなくてはならないということ、尊い神々は、普段は神社ではなく磐座に降臨されており、そのことを神社自身も知っていることではないでしょうか。

尊い神々は精神文化時代の齋場を好まれるのです。それは、齋場を作った人々の精神の違いではないでしょうか。神社を建てるためにもいろいろの苦勞があります。まずご神木の苗を植え、立派な建材に育てねばなりません。宮大工は、全工程水をかぶって身を清め精進潔斎をせねばなりません。しかし元はといえば、神社は人間の便利によつて建てられたものです。他方、木造建築は巨石を運ぶことに比べれば、はるかに容易です。居住地から近くて、山へ登らなくてもよいし、参拝者も大勢集まり御供物もお賽銭も沢山集められます。物質にこだわる人間の目から見れば立派な神社でも、そこに

籠めた神に対する純粹な真心や献身の度合いにおいて磐座は神社に及びません。

文化の違い

私たちは、最高とはいわないまでも、かなり高度な物質文化の中で暮らしていると信じています。歴史を振り返り縄文時代の人々の暮らし振りを勉強すると、その確信は一層強まります。生産力の発達、通信や交通をはじめ、あらゆる技術と機械の発達、私たちは炎の夏は涼しく、凍る冬には温かく暮らしています。いつ開けても冷蔵庫に食糧が一杯詰まっています。現在ほど生活が豊かに便利になったことはないと自負しています。それに比べて古代には、見るべき機械も道具もなく未開であり、そのまた昔は野蛮であったと、歴史を発展の歴史として把握した古今東西の歴史家たちは説いています。今必要なことは、長い間人々の脳裏に浸透してきたこの歴史観を、どんでん返しにひっくり返さなければ、真実が見えてこないと言うことです。つまり、未開・野蛮といわれてきた古代は、未開でも野蛮でもなく、実は高度な精神文化の時代だったということになります。

精神文化と物質文化では、先に述べたように、総合文化か縦割りの寄せ集め文化かの違いがあるのみならず、その価値観が白黒ほど

遠い。例えば、精神文化では目に見えないものを尊び優先します。しかし、物質文化では目に見えないものは無い。つまり、存在しないと見られがちです。その存在を、立証できないものを尊んだりこだわったりすることは科学的ではなく、従って、信用するにあらず、幼稚であり、狂言的、迷信的であり、研究の対象にはならない、取るに足らないものです。

古代の研究は、これほど機械や技術や知恵の発達した現代でもなお不明の点が多くあります。大型機械のない時代に、エジプトのピラミッドのみならず、日本の磐座の巨石もいかにして山上へ運び得たか、ナスカの地上絵はいかにして画かれたか、今もって謎です。

なぜなら彼らの心中奥深くに「現代人に出来ないことが未開である古代人にできるはずはない」という確信があるからです。日本の場合にも磐座を認めようとしなない人たちの中には、山上へ運んだ岩の運搬方法が立証されないから磐座自体を認めないと、それがあたかも科学的であるかのごとき態度をとる人が少なからずおります。北アメリカ大陸の太平洋沿岸には、古代における東西文化の交流を示す遺跡や遺物がありますが、小さな葦船や木船で太平洋を渡るなど我々現代人にできないことが、古代人にできるはずはないと心中深く自負している日本の学者は、意地にも認めようとしなないかのようです。

また、すべての磐座がそうだとは言えませんが、非常に尊い磐座の中には、どうしてもこの場所が選ばれたのかについて人知を超えるものを感じることがあります。山頂の磐座は決して人間にとって便利な場所ではありません。険しく人目につかない辺鄙な場所でもあります。不思議なのは、その場所が万をこえる長い歴史のなかで、地震や山崩れなどの自然災害や人間による破壊行為によって崩壊することなく現在に至っているということです。将来起こるであろう災害を見通した上で、安全な場所を選ぶ、これは人間にできることではありません。そこで私は考えたのです。何処にどのような形態の磐座を構築するかは古代人ではなく、神が自ら決められたのだらうと。今でも名僧や信仰深き人が、夢で神のお告げを聞いて、寺や神社が建てたという話を聞きます。太陽と自然を深く崇拜していた精神文化時代の人々が、そこに神の姿を見、神の声を聞き、神の意図を強く感じるということは、珍しいことではなかったともいえます。では、なぜ現代人には神が見えず、神の声も聞こえないのか。それは、人間そのものの違いと言わざるをえません。

人間の違い

人間を構成するもののうち肉体以外のもの、すなわち精神とか靈魂とか思想などを一括してこれを肉体に対して「霊体」と呼んで分

析を進めたいと思います。この肉体と霊体は、死が両者を引き離すまで、健全な肉体に健全な精神が宿るといふ関係において互いに影響しあいながら分かち難く一つに合体しています。その合体のあり方は、均等ではなく「肉体は霊体の器」という関係にあります。器である肉体は物質ですから使えばすり減ったり壊れたりします。その寿命も平均年齢として計算されています。しかし霊体は不可視的ですから、その質において禽獣のそれと同じと言えるほど墮落することはあっても短期に消滅することはなく、その寿命の長さも不可知に長いと言えましょう。

ところで、現代人は人間としてどのように評価されるでしょうか。現代人は縄文古代人とどこが違うのでしょうか。まず容易に考えられることは、物質の進化、すなわち道具の機械化とその大型化と緻密化によって現代人は殆ど歩きません。陸海空の交通機関が発達した結果、非日常的に特別行事として登山や海水浴を計画しないかぎり、歩くのはバス停までと会社や家の中だけです。手足の衰えた人間は、南米密林の木の上でじつと止まっている「なまけもの」と言われる動物のようです。知的活動もテレビと電話、携帯とパソコンのスイッチを入れるだけで世界と繋がり、自ら靴を履いて取材や調査に歩きまわることには不用です。こうした生活が続くと、自分で考えることが少なくなり、人は自分または自分の家族に利するこ

と以外に、興味を示さない社会的「なまけもの」となってしまふのです。

肉体の退化は頭脳や五感の退化に繋がります。衣食住を求めて野山を駆けめぐっていたころは、天地の恵みに感謝しつつ、人間は肉体の限界を超える労働に挑戦し、肉体と五感を鍛えていたのです。

現代では視力が^{2.0}もあれば見え過ぎて遠視の気があるといわれます。現代でもまだアフリカ奥地には視力が^{6.0}の人が居ると報道されて話題となったことがあります。古代人の視力はそれ以上だったのでしよう。これに対して小学生から眼鏡が必要なのが現代です。同様に耳も鼻もそして第六感と言われる霊体を感じ取る能力も極度に鈍化してしまつて、もし古代人が現れて現代人を見たら、とても同じ人間とは思えないでしょう。

四国の西南端に位置する足摺岬は、南方から北上する黒潮が日本列島にどんとぶつかつて伊豆、太平洋へと右折する要所で今では立派な灯台が立っています。灯台は古代でも不可欠だったはずですがそこには巨石が海へ向かつて並べられています。つるつるに磨いた石の表面は何かを反射するかのようです。しかし、幾らつるつるでも果して真つ暗な海に、真つ暗な闇夜に岩が灯台のように光るのでしようか。現代人としては、さしずめ岩を銀紙で覆いサーチライトでも照らしてみなくては立証することはできません。銀紙もサーチ

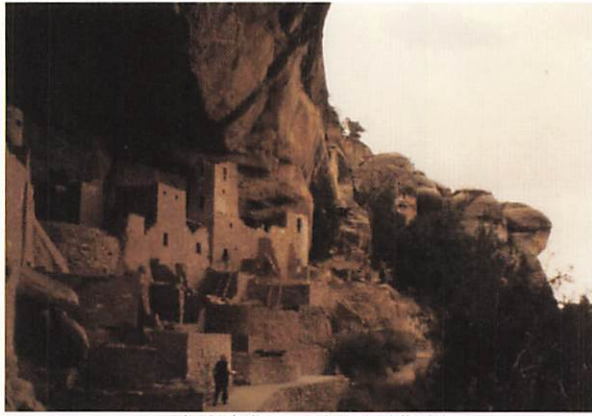
ライトもなかった時代です。しかし古代人は現代人にもないものを持っていました。それは、優れた視力です。彼らは、巨石の上に微かな星の光の反射を見つけることができたということです。リーダーも望遠鏡もなかったときに、彼らは空の星、海の色、風の方向によって大海を航海したのです。昼間でも空に星を見ることができたという見解もあるくらいです。私たちには何も見えません。でも古代人の目には、真っ暗な海のはるか彼方の地平線の近くに、岩に反射する星の光を見つけることができたのです。

五感よりも更に大きな違いは、第六感といわれる霊体の能力の違いです。古代人は木や花や鳥の心の声を聞くことができたのです。

巣に残してきた小鳥のために懸命に餌を集めている鳥、その心が分かれば、どうしてこれを殺すことなどできましようか。何百年、何千年もの長い風雪に耐え抜いてきた古木には、神宿ると言われるほどの生命力が漲っています。森の生物は、古代人を含めて皆この古木を尊び、敬い大切にしてきたのです。しかし、それを感知できない現代人は、すばらしい家具の材料が見つかったと算盤をはじいて喜び一瞬のうちに電気鋸で切り倒してしまいます。山の管理が国家の手を離れて各地の営林署の独立採算に任せられてからというもの、どんなに多くの古木や地元の誇る山桜の並木が伐採されたことでしょうか。山は金回りの早い杉の植林に変わってしまったのです。保水

力のない杉山では大雨に会うと山崩れを起こします。度重なる山崩れを、中央政府はダム建設で解決しようとして、村長を先頭とする地元住民と対立、政府は学者の加勢を得て強行突破しましたが、結局ダム政策は失敗、今も小学校や民家の多くがダムに半ば水没した状態で放置されています。悲劇はさらなる悲劇を結果するのです。NHKの深夜放送「誰が泣いてくれりよか」を観ると、古代人の霊体の能力は私たちの想像をこえて多種・強力で、第六感のほかにも天候に関する靈感や、亡くなった人や先祖や神との霊的交流などが盛んだったようです。

考古学者を悩ました古代遺跡の謎の一つに、マヤ文化のような大規模遺跡で、ある時、突如として何が理由で何百人、何千人の住民が住み慣れた住居を放棄せざるをえなかったのでしょうか。彼らの天候に関する靈感が、近い将来に大飢饉がやって来ることを察知したのです。インディアン・カントリーといわれる北米西南の四州の中心に、ホワイトハウスと（白人によって）名付けられた美しい古代先住民の住居遺跡があります。その住民は、ある時一斉に住居を出て山を下りリオ・グランデ川の流域に分散して住むようになり、今ではそれぞれ独自の名と文化をもった部族として存在しています。アメリカ先住民の現代の生活の中には、古代の精神文化が色濃く残っています。また彼らはことあるごとに頭や体に飾りをつけて円



古代先住民の住居（北米）

になつて踊り廻りをします。現代日本でも狩りに出かけるときには山の神に供物を供えて大獵を祈ります。しかし両者では祭りの内容が違います。たとえば、先住民は熊を狩りに行く時には熊の偉大さを称えます。人間のおよばない強力な力、美しい毛並み、他を震えあがらせるその大きな唸り声を褒め称え、偉大なる熊の毛皮を、かぶり熊のように走り踊り叫び熊の偉大さを表現します。鷹を狩る時には、まず人間の持つていない空を飛ぶその力の偉大さを褒め称え、その鋭い眼も嘴も羽の色も美しいと称賛します。頭に鷹の羽根をかぶり鷹を体で表現して飛び回るのです。

またアマゾンの大森林地帯には、数多くの動植物が住んでいます。現代人はそれに見つけて、人間に便利の良いように縦断する道路を付け、さらにそれを横断する道をつけ、さらに人間の住む都市地帯を造り、年々それを拡大しています。そのために、どんなに多くの動植物が生活の場を失い家族を引き裂かれて嘆

き悲しんでいるか、現代人には分からず無関心でもあります。

人間は何をしても許されるのでしょうか。人間以外の生物を見下し、差別し、収奪し、犠牲にしてもそれが人間の利益に適って居れば許されるのでしょうか。顔を見れば殺されて食べられるか、殺されて金銭に変えられるか、他の生物にとって人間はまるで殺人鬼です。彼らの声が聞こえます。

「人間さえ居なくなればこの地球はどんなに楽しく平和なことだろうか」

物質文明が進むにつれて、いつのまにかこの地球は人間優越主義がはびこり、人間至上主義の支配するところとなったのです。この苦境の中で我々は、自らの根源について問いたださねばなりません。

「われわれ人間とは何か」

「人間が、この地球に生み出された理由は何か」

「人間の魂は、どこでどのようにして生まれたのか」

物質文化の中では、人間の物質面すなわち肉体については、生物進化や医学、遺伝、細胞学の分野においてかなりの研究がなされてきました。人間は西アフリカで誕生し、暫時世界中に拡散していったとのことです。しかし、人間の霊体、中でもその中核をなす靈魂はどこでどのようにして誕生したのでしょうか。その答えは強いて言えば、高度な精神文化時代の人々の思想の中にしか見出すことはで

きません。これらへの解答は、高度な精神文化の中に生きていた縄文古代人の世界観の中にこそ見出すことが可能です。

天の反応こたえ

しかも現代の資本主義体制はこれに拍車をかけて居ます。自由競争を基本原理とする現代社会では、企業の経営者が同業者との競争に勝つために死活の競争をしているだけでなく、そこで働く社員たちも隣に坐っている仲間と昇進を争いながら働いているのです。たとえその結果相手の会社を破産に追いこみ、一家心中の悲劇を化したとしても、罪の意識を感じる理由はありません。家の中では隣の亭主が課長に昇進したとか、新しい車や冷蔵庫を買ったことが、隣に住む主婦の生活の競争目的になります。子供の世界でさえ、友達との競争を余技なくされています。将来有名大学へ入学するためには、関連の幼稚園へまず合格しなければならず、彼は幼いころからすべての友達をライバルとして競争に勝たなくてはならないのです。大人から子供に至るまで隣人との横の競争・闘争に没頭していて、お月見以外は滅多に空を見上げることはありません。

では自由競争のなかった古代では、人々は何に向って生きていたのでしょうか。それは地上のものではありません。空の上、すなわち宇宙なのです。でも私たちには分かりません。このちっぽけな人



国見岳の秋祭り（熊本）

間が、広大無限な宇宙に向かって一体何ができるのでしょうか。

それは、一九〇〇年代半ば、九州国見岳での秋祭りの時でした。

珍しく十一月の初旬に雪が降り、空は一面雪に覆われて一片の青空も見ることが出来ませんでした。それでも寒空のなかを例年より多くの人々が山頂に集まり雄叫びを挙げたのです。北は北極に届くよう、西は熊本、玄界灘を越えてシベリア・バイカル湖へ、南は桜島、オーストラリアを越えて南極にまで届かせオゾンの穴を塞ぎましよう、と百五十人の雄叫びが、四方の山々や谷間にこだました、そのときです。目の前の空が一瞬にして真っ青に変わったのです。

空一面を覆っていたあの重い雪雲はすっかり姿を消し、紺碧の秋空が目の前に現れたのです。誰も予想だにしなかったことです。でも天は私達に反応(こたえて)してくれました。何という不思議！そして何という歓び！宇宙に向かって生きている縄文人の日常生活の張り合いと歓びの一端に触れた思いでした。翌年の秋祭りにも同じことが起こりました。でも、二年目は空全面が真っ青になるのではなく紺碧の青空は大きく円形を描いて現れたのです。

《参考文献》

荒深 道 斉 著

日立 道根彦 編

・ 神之道(初学)

・ 綜合古事記純正講本(一、二、三卷合本)

・ 神武太平記(上巻、中巻、下巻)旧在世記

・ 天孫古跡探査要訳

中島 和子 (なかじま よりこ)

- ・ 同志社大学卒業。政治学専攻の法学博士。
- ・ 桜美林大学、京都精華大学教授を経て磐座研究へ進む。
- ・ 現在「古代における政治と祀り」をテーマに日本とアメリカ大陸先住民の古代文化を研究中。
- ・ 一九八五年・九州山地主峰・国見岳古代祭場保存会を結成し事務局を担当して現在に至る。
- ・ 一九九〇年・六甲山・甲山周辺の磐座を守る運動を始め
- ・ 一九九九年七月・NPO古代遺跡研究所が認可され所長となる。

閉会へ向けて



全体の経過報告とツアーの概略

NPO古代遺跡研究所東京支局 高橋 滋生

成功裡に閉幕のご協力、ご支援を有り難うございました

初秋の兆しが漂い始めた九月二十

七日・二十八日(土・日)、懸案のイワ

クラサミットは、予想を超える九十

余名の参加を得て二日間の日程を

滞りなく終えました。素晴らしい天

候、秋の日を受けて気力満々、十全

の満足を得て終了することが出来ました。何事も終えて反省してみれば、

落ち度はゾロゾロと出てくるのですが、本筋において真つ当であれば「よ

し」とさせていただきます。至らなかつた点について、改めてお詫び申し上

げます。

阪神地区の、貴い磐座を抱く、わが古代遺跡研究所が何故、いまイワ

クラサミットの開催地として名乗りを挙げたのかは、中島所長の「開催へ

の決意」をお読みください。ここでは一月二十日、サミット実行委員会が

結成されてからの、二五一日間の闘いのいきさつと、二日間のサミットに

ついて振り返ってみます。



私たちの古代遺跡研究所は、発足以来十年、研究の方向性として、月

に一度の会合の折々に、中島所長より磐座の真の捉え方、磐座に存在す

る精神性、建立した縄文人の世界観、山の開発による磐座の破壊、その

保護、等々他県、全国にわたる問題でもあるけれども、ともかくお膝下

の神戸から、それらの啓蒙活動をしなくてはいけないのではと言われ続け

てきました。しかし、サミットで全国から集まってくる磐座専門家に、そ

れらを説明するのには、私たち研究会のメンバーは、まだ力不足で「時期

尚早」と思っていました。ところが、いつのまにか「やりましょう！」という

固い決意が出来てきて、実行委員会も発足していました。中心になって、

指揮をとる所長は左半身不自由の身なのです。しかし、側近としての会

員たちが、所長との信頼関係において、手となり足となり指示どおりに

動けばよいわけです。中には、指示を十二分通りにできたこともあり

ましたが、事務処理に慣れていない私たちは、所長の左手足の様にはいか

ず、何度もやり直しをさせられました。しかし、所長の指示は適確で、

沢山の「ありがとう」を全員が受け取ったのです。

当研究所は、全国で百余名の会員を擁するといっても、会費を納めて

下さる方は七割、京阪神で三十名、いつも「中核」になって動いている会員

は十名。その七割は現役の勤務者で、土日曜の時間があるだけです。終

始十名足らずの「中核派」が、所長の側近として脇を固めていました。

一方、所長はコンピューターと印刷製版技術者を擁して指示のもと、

しおり(総覧)、ポスター、図表、展示物、スライド、等々を制作、コンピュータによって日々、五月雨的に到達する申し込み者の名簿づくり、ホテルとの価格交渉、出席への誘い、ツアー候補地の整備を森林事務所と交渉、磐座の土地所有の会社、芦屋大学との交渉、さらに兵庫県庁の知事や教育委員会の後援の取り付け、西宮市の後援取り付け、主催のイワクラ学会との連絡と折衝等々、山積みの仕事。そして、何よりもこれをみんなにアピールしたいというメインのサミットでの講演の準備。中島所長、本当にお疲れさまでした。

あと六十七日(八月三日現在)となった実行委員会の頃から「中核派」には一致団結した気運が漲っていました。所長以下誰も、大変だとか、辞めたいとか、下りたいとか、暑いとか(それは言ったかな)、仮病を患うとか、弱音を吐くメンバーは誰もいませんでした。仕事の合間を縫って、ペーパーワークのために研究所に詰めてくれた人もいました。この頃から、ツアーの準備として、四カ所の磐座の整備が始まりました。そのとき武部正俊さんと青野陽子さんという造園業の、山野の整備はお手のものという達人と、神戸森林所の池田安廣氏が現れて、私たちに大きな助力をしてくださったことは、磐座を護ることへ大きな力が働いていることを感じないわけにはいきませんでした。

炎暑のなか、メンバーの八十四歳の藤本チヨさんも雑木の伐採にめげもせず働き驚かされました。

九月二十七日、天空に東雲が曙光を見せ始めたときからサミット in 神戸初日が順調にスタートしました。十七都府県から九十余名が昼前から会場六甲山ホテル受付に到着し始めました。北は青森・八戸市の杉田修一さん、南は九州・佐賀の末次祐司さん、足摺岬から富田・谷の両氏を含む方々が、大きな荷物を持たれて、暗い朝からのご出立と思われますのに、疲れた気配もなく気力を漲らせておられました。各地域の皆様、良い収穫を十二分に持ち帰って下さいね。

ホテルの宴会場は満席となり、配布する資料は不足し急遽コピーで補いました。

講演会の部は順調に進んでいきました。まず、地元代表として兵庫県井戸知事の出席が叶わず、代理として教育委員会文化財村上室長の理解溢れるウエルカム・スピーチによって始まりました。イワクラ学会会長渡辺豊和氏、わが研究所の中島和子所長からの挨拶に続いて、講演、研究発表が滞りなくすすみ、活発な質疑応答が行われました。それぞれ、レジメ、映像の紹介をしながらユニークな話題、学説を披瀝しました。

講演会に続く座談会は、伊藤昌代ご推薦の神戸灘の雄々しい酒造り唄と和太鼓で始まりました。良い水、良い米、でつくる灘のお酒の物語。

この地ならではの伝統的な芸能です。そして、お待ち兼ね、十七都府県の磐座研究者が利き酒で乾杯し、飲みかつ食し交流、歓談しました。工藤寛治さんのギター演奏によって自作「いわくらの歌」が披露されました。

た。

広田神社・西井官司より励ましの力強いお言葉を戴きながら宴もたけました。閉会のお言葉は、元西宮市議会議員で、当研究所の理事、ペルー生まれの、鳥飼黎明氏より戴き懇談会を締め括ることができました。さあ、一同は明日、待望の山上の磐座と対面するのです。

六甲山上の磐座四ヶ所をめぐるツアーを追って

一 「三国岩」 みくにいわ

ツアーのメインは、三国岩で、あらかじめ雑草を刈り、茨や灌木が伐採されていきましたので、磐座の高貴な姿はいつそうに清々しく見えました。中島所長が「磐座は神社の元宮ですから、神社ですするような礼儀を尽くさなくてはなりません」と分かり易く説明されました。縄文人に倣って国境のない時代の地球平和を祈る祝詞(トホカミエメタメ)を二拝二拍手一拝と共に捧げました。この祝詞は「空高く座します尊い神々、愛の目をもつてお守りください」という意味です。続いて、この場を清め、私たち自身を清める祓いの雄叫びを四方に向かつて挙げ、それぞれの魂を込めて玉串を奉典しました。この祭場でこれほど多くの人々の声が唱和することとはまたとない美しい稀有の情景でした。この磐座に降臨されるご祭

神は天照皇大神あまてらすおおみかみで、磐座の前に聳える磐門いわとに降臨される神は手力たぢからの命のみことと、有馬日岳ありまひたけの命のみことです。磐座についての詳しい説明は、付記の論文をご参照ください。

二 「天の穂日の神の磐座」 ほひ

阪神カントリーハウスの駐車場から真正面に見える丘の上の半円形の優雅な磐座が、天の穂日の神の磐座です。小さな試練を経て、一同息を整えました。ここでも三国岩と同様の参拝をし、十分の自由散策の間に、各々はカメラに美しい磐の姿を納めました。六甲山 Y M C A にて、カレーライス、コロッケなどの昼食をとり、さあまたマイクロバスに乗り込み次へ向います。

三 「剣岩」 つるぎいわ

手付かずの山林の原野に埋もれていた剣岩は雑木が伐採され、足の踏み場も危うかった周辺に、七十人からの人々を安全に迎え入れる広場が作られていました。威風堂々とした磐、オリオン座の刻まれた幻の磐に一同、固唾を飲みました。この磐座のご祭神は武御雷たけみかづきの神(雷神)です。

四 「八咫の鏡岩」 やた

芦屋市の鏡岩は、芦屋大学の建設が進んだ中で破壊を免れたものの磐

座への途が失われ、大学の中を通ることになって、大学の許可が必要となりました。単独で堂々としたその容姿は、幅四メートルで淵のフリルも昔のまま残っており、威厳に満ちて美しい宝です。「どの磐座も一目見ただけで帰らなければならないのは残念だ」「去り難い」という声が上がりましたが、帰路の飛行機、新幹線、バスなどの交通機関の時間を気にする声も届いて、進行係は時計と睨めっこです。「途中から帰りたくないのです」「全部見たいんです」当然です。遠路はるばる来てくださったのですから。

やしろのおいかけ

ご祭神は八意思兼の神です。

解散時間が迫ったため、磐座に簡略なご挨拶をしてその場を離れました。一同が大学の構内に下りた頃ぽつんと雨滴が頬を濡らしました。待っていてくれたとばかりに。今日一日の晴天、ありがとう。「芦屋で皆さんにお別れしたい」という所長の願いが叶って、四時芦屋にて遠い帰路に着くたくさんの朋友に別れを告げました。

また訪ねてきてくださいね。遠路お疲れ様でした。



閉会の辞

古代遺跡研究所 理事 鳥飼 黎明

磐座との出会いは、もう十年も前になります。中島和子先生が京都精華大学を定年退職される時の記念講演で、ペルーの話をされると聞き、京都まで行き講演を聞かせていただいたことに始まります。その時に、磐座とペルーとの関係をお話しされました。



本日の講演会でも、ペルーの話が出ましたが、日本の天孫降臨とペルーの天孫降臨がとてもよく似ているんですね。ペルーには、チチカカ湖という湖があるのです。ボリビアとペルーの境にある大きな湖で、そこへ天孫降臨があったという伝説があります。日本の「天の磐門」とよく似ていますね。

言葉も似たところがあって、例えばペルーでは、家のことを「カサ」といいますが、日本では雨のときに使う「傘」と全く似ています。

そのように言葉が似ていたり、ペルー人の顔はとても東洋人に似ています。

私は、ペルーで生まれ、十二歳までペルーにいましたので、クスコとかマチュピチュの周辺に、終戦後五回ぐらい訪れました。その間に、磐座とよく似た建造物や石造りの遺跡をたくさん見てまいりました。私は今はもう八十歳になりますので、南米まで出かけるこ

とはできませんけれども、先ほどお願いしております日本とペルーの絆を、サミット磐座を通じて、これからも皆さんと一緒に勉強して、さらに前進していきたいと思っております。

今日は九十名を超える、全国の同志にお集まりいただき、本当に有意義なお話をたくさん聞かせていただきました。どうかこれからも、これを機会に阪神間、西宮、兵庫県をお忘れなく、ひとつ仲良くしていただいて、さらに、磐座サミットが盛大に開かれますよう、是非、この次引き受けて下さる所は大変ですけれども、私たちが押しかけて行つて、賑々しく「イワクラサミット」を盛り上げて行きたいと思っております。

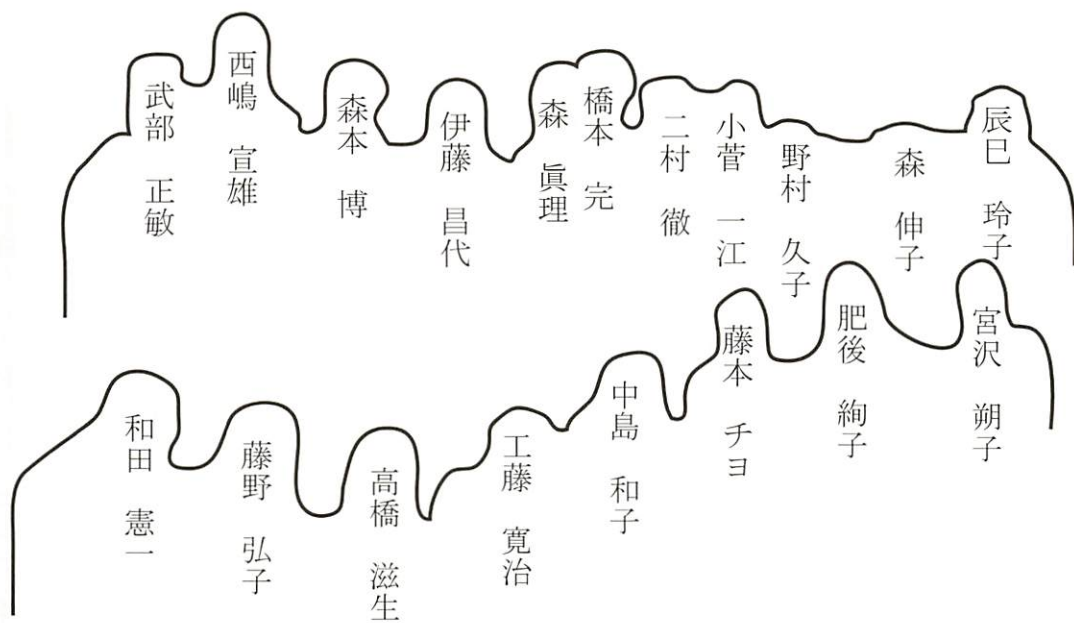
本日はありがとうございました。

鳥飼 黎明 (とりが い れいめい)

一九二九年、南米ペルーに生まれ、十二歳のとき両親と共に日本へ帰る。

成人して西宮市の公立中学で英語教師として十五年、その後西宮市の市会議員をして二八年、兵庫県より自治功労賞を授与される。現在、当NPO古代遺跡研究所の理事をつとめる。

イワクラサミットの仕掛人一同



(敬称略)

感謝

NPO 古代遺跡研究所 所長 中島 和子^{ヨリコ}

多くの人々から協力を頂いて無事二日間のサミットを終えることができました。

サミット開催前からイワクラの草抜きと周辺の清掃と整備、特に原野にある剣岩の磐座周辺の草木や山道の整備をしてくださった青野陽子さん、池田安廣さん、武部正敏さん。サミット開催時に撮影を担当してくださった山口順二さん、大月竜さん、藤本チヨさん。また、灘の酒造りの唄の出演の交渉、紹介にご尽力を頂いた伊藤昌代さん。この冊子を作るに当たっては、パソコン関係の責任を負ってくださった原田ゆかりさん、校正の労をとってくださった高橋滋生さん。さらに、兵庫県知事への橋渡し役を担ってくださった元神戸YMCA総主事、今井鎮雄さん。また、阪急電鉄(株)からのご寄付については大橋太朗さん、和田憲一さん、大勢の人が集まる時、食べ逸れの人が出ることを予知して、お寿司を差し入れてくださった故野村久子さんのお心遣い、等々多くの皆様のご尽力を頂きました。心から感謝申し上げます。



原田 ゆかり

こぼれ話 一

初日の朝早く二人の女性が六甲山ホテルの私の部屋へ飛び込んできた。

「中島さん！空を見てください！素晴らしいお天気ですよ！」窓を開けると、紺碧の秋空は太陽の光が満ち満ちて眩しいばかりだった。雲間から迸る数条の後光は山並を温かく包んでいた。

「これはきつと、イワクラの神のみならず、山の神も天の神も皆様総出で今日のサミットを祝福されているようです。今日のサミットはきつと成功ですよ」と辰巳玲子さんと母君の野村久子さんの素晴らしい激励を受けて、心弾み身の引き締まる思いだった。

こぼれ話 二

やがて日が暮れて、賑わっていた宴会場も静まり、参加者達も割り当てられた部屋で就寝の準備をしていたころだった。

一人の腹ペコさんが私の部屋へ飛び込んできた。

「中島さん！何か食べる物はありませんか？」

彼はビデオカメラを抱えて一日中走り回っていた山口順二さんだった。「さあー」と私は自信無げに部屋を見渡した。と、その時目に入ったのは、今朝早く野村久子さんが素晴らしいお天気の情報とともにそつと差し入れてくださった一箱のお寿司だった。人が大勢集まる時、食べはぐれの人が出ることを知っていた野村さんは、朝早くお寿司屋の戸を叩いて一箱拵えて差し入れてくださったのだった。その大きな思いやりに心に深く感動して、彼は感謝と満腹の安らかな眠りについたのは言うまでもない。外は百万ドルの夜景、内にも百万ドルの感謝に包まれて初日の夜が更けていった。

いわくら 八磐座V 第二号 二〇一〇年十一月発行

発行 NPO古代遺跡研究所

〒662-0895

兵庫県西宮市上ヶ原五番町三ー二七

編集責任者 NPO古代遺跡研究所 所長 中島和子よりに

電話 〇七九八ー五ー七三三一

FAX 〇七九八ー五ー九五二〇

HP http://www15.ocn.ne.jp/~kodaiisk/

E-mail kodaiiseki@live.jp

いわくら <磐座> 第2号 2010年11月発行

編集・発行

NPO 古代遺跡研究所 中島和子

〒662-0895 兵庫県西宮市上ヶ原五番町 3-27

電話 0798-51-7331 FAX 0798-51-9520

H P <http://www15.ocn.ne.jp/~kodaiisk/>

E-mail kodaiiseki@live.jp